

京都の新しい公立大学
福知山公立大学
The University of Fukuchiyama
地域経営学部 地域経営学科/医療福祉経営学科

〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
TEL.0773-24-7100 FAX.0773-24-7170
<http://www.fukuchiyama.ac.jp>



地域協働型実践教育
2018年度 成果報告書



はじめに

2016年4月の開学にあたり、本学は“市民の大学”“地域のための大学”“世界とともに歩む大学”という基本理念を掲げました。この大学は市民と学生が地域とともに学び合い、地域が抱えるさまざまな課題に向き合い、“地域に根ざしながらも、世界に開かれた学びの拠点”となることを目指しますとも表明してきました。

この理念と目標の実現のために、教育研究の場できりわけ力を込めて試みているのが本学の「地域協働型実践教育」です。1～4回生全員がそれぞれに選択したテーマにしたがって担当の教員とともに地域を訪問し、住民の方々に話を聞き、共に地域の課題について考え、その解決の方向性について検討するという授業です。

この小冊子は、2018年度その授業の全体をまとめたものです。これで、開学後3度目の報告集になります。授業の基本的な目的や内容は変わっていませんが、少しずつ前進している様子を読み取っていただければ嬉しいと思います。

最初の報告集だった2016年度のものに、私は「ご覧いただければ一目瞭然ですが、決して十分なものではありません。担当の教員が、今年度この科目でどんな授業を行ったかをごく簡単にまとめたものに過ぎません。学生諸君が寄せているのは、感想のようなほんの一言二言です。」と書きました。続く昨年度・2017年度のものには、『学生の感想』欄にはもう少し踏み込んだ内容が書かれ始めています。とはいえ、自分たちは何をどう学び、次の学習課題をどう考えたかなどを十分に語るには至っていないように思われます」と書きました。

それに比べると、本年度の報告集は、誌面構成もかなり変わり、工夫されたものになっています。とりわけ、学生諸君の「気づき・コメント」欄(半期の授業だったものにはこの欄はありません)が大きくなり、そこには自分の学びについてかなり書き込まれています。

ここからさらに前進して、学生諸君がこの授業の主人公となって、自らの「到達点」と次なる学びの「課題」をいっそう深く、明確に語るようになってくれることを期待しています。

なお、末尾になりましたが、この授業の受け入れ先となってお力添えくださいました地域の方々に篤くお礼申し上げます。

ご協力くださった地域の方々をはじめ、ご関心をお寄せくださる方々からの厳しいご批判と温かい励ましが頂戴できれば嬉しい限りです。

福知山公立大学 学長 井口 和起

目次

はじめに ————— 1

第1部 福知山公立大学における地域協働型実践教育

- 1 地域協働型実践教育とは ————— 3
- 2 実践教育フィールド一覧 ————— 5

第2部 各ゼミの取り組み報告

- 1 地域経営演習Ⅰ、Ⅱ(1回生) ————— 7
- 2 地域経営演習Ⅲ、Ⅳ(2回生) ————— 14
- 3 専門研究Ⅰ、Ⅱ(3回生) ————— 24
- 4 キャリア探究Ⅰ、Ⅱ(3回生) ————— 31
- 5 キャリア設計Ⅰ、Ⅱ(4回生) ————— 43

第3部 地域協働型実践教育成果報告会 ————— 47

第4部 学生プロジェクト ————— 49

第5部 実習活動

- 1 地域キャリア実習 ————— 53
- 2 診療情報管理実習 ————— 55

第6部 他大学との交流事業 ————— 57

地域協働型実践教育とは

本学は「市民の大学、地域のための大学、世界とともに歩む大学」という基本理念のもと、「地域(ローカル)に根ざし、世界(グローバル)を視野に活躍する人材」いわゆるグローカリスト[※]を育成することを目指しています。このグローカリストの育成にあたり、具体的に身につけさせるべき能力について、本学のカリキュラムポリシーでは「知識」「技能」「遂行能力」という3点に着目し説明しています。それぞれ簡単に説明をすると、社会の基本構造および現代社会が抱えている課題についての「知識」、問題解決につなげるための情報を適切に収集し分析できる「技能」、リーダーシップとパートナーシップを柔軟に使い分け問題の解決に向けた活動ができる「遂行能力」を指します。

※グローバル(global)とローカル(local)を組み合わせたグローカル(glocal)という言葉に、人を意味するイスト(ist)を付けた造語

これらの能力を育成するにあたり、1年次から4年次でそれぞれ以下のような方針で座学と実践的学修がカリキュラムに組み込まれています。

初年次

学びを体験する

(体験学修と教養学修の組み合わせおよびフィールドワークの基礎的知識の学修)

2年次

学びを広げる

(学修者の関心にそった教養教育の提供、フィールドワークの基礎理論と分析手法の修得、地域の活動体験等を通じて、地域社会の課題の発見、分析、その解決に必要な手法を実践的に学ぶ)

3年次

学びを深める

(演習等の学修グループによる特定の組織・団体等の課題を対象とするPBL(project-based learning:課題解決型学習)等を実施する)

4年次

学びをまとめる

(グループ単位での一定のまとめを行うとともに、卒業論文を個別にまとめることを重視する)

地域協働型実践教育とは、こうしたカリキュラムの中で、学生が教員だけでなく学外の様々な方々と交流をしながら、地域社会が抱えている課題とリアルに向き合う教育活動を指します。本学のカリキュラムでは、その取り組みが中途半端に終わらないようにするために、時間割上でもフィールドワークの時間が十分に確保できるように工夫し、1年次より地域の課題と向き合う演習科目を開講しています。

この報告書は、その各演習科目で2018年度に実施した内容について紹介をするものです。受け入れ先の皆様のご理解とご協力をいただきながら、学生が地域の課題と向き合う機会を創出してきました。また、この報告書で記載している活動以外にも、講義の中で学外の方をゲストスピーカーとしてお招きするなど、地域と大学が連携しながら学生の教育にあたっています。

加えて、本報告書にも紹介しておりますが、学生と地域の方々とは協働して実施するプロジェクトを学内公募し、学生が自主的に地域の課題に取り組む活動を企画・運営する「学生プロジェクト」の実施件数が増え、他大学と交流する機会に積極的に参加しております。このように、正課の授業以外にも地域について学び、その学びを外に広げる機会を提供しております。本学の地域協働型実践教育は、講義科目や、演習科目や、また、正課外の活動など、様々な場面で多面的に実施しており、今後も更なる充実を目指し随時検討をしていきます。

受け入れ先一覧

人との交流と「まちづくり」

1 福知山市三和町の地域課題

社会福祉協議会との協働から見た
地域の防災・居場所づくりの意義とその継続可能性

2 地域社会の問題解決を試みる小さな社会実験

～内田町自治会、新町商店街をフィールドに～
PBL(プロジェクトベースドラーニング)から考える福知山の公共経営

3 福知山市大江町の地域課題を分析する

4 夜久野町における文化資料のデジタルアーカイブ化

地域の魅力を高める産業活動・交流活動への参加
農村の暮らしを知る

知恵を集めて未来をつくる場「ワークショップ」の理論と実践を学ぶ
～ワークショップ「暮らしとまちを見直す井戸端会議」の開催を通して～

5 地域活性化に取り組む多自然圏での参与観察調査

6 近隣自治体から学ぶ公共政策と地域創生

～朝来市梁瀬地区におけるフィールドワークを中心に～
教育行政の基本理念と諸制度について

観光地経営の観点から海の京都観光圏を考える

福知山市在住高齢者の医療と健康に関わる調査

イノベーションによる地域活性化の可能性検討

中国語能力のレベルアップと地域観光への実践

地域社会の課題にアプローチする道筋を体験する

gretl(グレーテル)による計量経済学

ロジスティクスに関する事例研究

公共政策としての「まちづくり政策—その具現化のための手法、道具づくり」

非財務情報を活用した定量的・定性的分析による地域課題の把握と解決策の検討

身近に感じる「問い」を明らかにすることで、専門研究のテーマを意識する

わが国の租税制度を理解する

「エックス系移住」～全国の「移住熟源」の可視化と編集による価値創出

病床機能報告・DPCデータ分析による医療圏別病院医療の分析

「皆との議論で理解が深まる」

仕事(ビジネス)とは「何か」を考える。

専門研究I:クルーズ船の船客の上陸時の行動調査

専門研究II:ロジスティクスの事例研究

TPP参加に伴う農業への影響試算

専門研究I:ヘルスツーリズムを題材とした運動習慣の形成

専門研究II:卒業研究に向けたテーマの提案

7 地域の特産物商品開発への挑戦

問題発見から解決を試みる小さなプロジェクトの実践

～新町商店街界隈をフィールドにしたワークショップ手法を用いた活動～

1人1プロジェクトリーダー制による地域創生とキャリア開発

8 「天職観光」(天職のヒントを探す旅)

～オーバーツーリズム時代の新しい旅の提案～

教育活動における中大連携の現状と課題

9 観光地域づくりの現状と課題を分析する

10 各自の関心にもとづく教育政策に関する問題についての

テーマ設定と調査の実施

京都府北部における高齢者ドライバーの交通事故防止政策



福知山市 福知山市三和町の地域課題



福知山市 地域社会の問題解決を試みる
小さな社会実験～内田町自治会、
新町商店街をフィールドに～



福知山市 夜久野町における文化資料の
デジタルアーカイブ化



朝来市
梁瀬地区 近隣自治体から学ぶ公共政策と地域創生
～朝来市梁瀬地区における
フィールドワークを中心に～



舞鶴市 観光地域づくりの現状と
課題を分析する



京丹後市
久美浜町 各自の関心にもとづく教育政策に
関する問題についてのテーマ設定と
調査の実施





綾部市吉美小学校で子供たちと給食を食べる

人との交流と「まちづくり」

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-A(1回生)

担当者名 平野 真/井上 直樹

演習の概要

まず地域の人々との交流を目的として、大江二俣和紙による灯籠づくりを、地元の小・中学生やろうあ者の方々で行った。子供達には、地域の文化資源の大切さを教え、共通の目標に向かって協働することを経験した。また、福知山市、綾部市、篠山市、舞鶴市などを視察し、町々の比較から、自分たちの「住みたい町、行きたい町」について考えた。その結果、生活の利便性のみならず、子育て環境の重要性、その基礎としてのまちの人々の交流や連帯感の大切さを学んだ。これらの学習を踏まえて、福知山市の中心市街地について、住民の方々ののぞむまちのあり方について意識調査を行い、自分たちが「まちづくり」に関して何ができるか考え始めた。



子供達とつくった和紙灯籠を飾ったイベント会場



ろうあ者の方々との交流 (@まちかどキャンパス)

学生の気づき・コメント

坂本 賢吾 | 地域経営学科 1回生 京都府立亀岡高等学校(京都府)出身

私は1年間を通じて、主に以下の3つのことを学びました。一つ目は、物事をよく観察し考察することで、一見しただけではわからないことに気づくことができるということ。二つ目は、多種多様な人と交流することで、新しい視点から物事を捉え直すことができるということ、三つ目は、地域問題について考えるとき、机の上で考えるだけでなく、実際に現地に赴くことも重要だということです。(中略)篠山市の景観は整っており、建物ばかりが目がいきがちですが、実際は道やマンホール、案内看板など細部まで工夫がされており、街全体として観光に取り組んでいること、吉美小学校では、児童の作品が廊下や教室に展示されていたり、看板になっていたりすることから、児童のことをよく考えているのだということが分かりました。(後略)

青木 英里奈 | 地域経営学科 1回生 静岡市立高等学校(静岡県)出身

この授業を通して、改めて地域っていな、人と人との繋がりがとても重要だと思いました。最初に行った灯籠作りでは、小学生や中学生、更には普段あまり関わることのないろうあ者の方とコミュニケーションを取ることができました。後期で行った現地訪問では、それぞれの街の良さを学びながら、たくさんの人と関わってお話をすることが出来ました。自分一人では出来ないことをたくさん経験させてもらったので、とても充実した一年になりました。この一年を通して一番感じたことは、福知山市は、これからの工夫次第でもっと良い街になれるのではないかとことです。(中略)1回生の間は「知る」ことができたので、2回生では自分が行動に移して福知山を良くしていく活動もできたらいいなと思いました。

山下 真莉奈 | 地域経営学科 1回生 京都府立西舞鶴高等学校(京都府)出身

私は、地域経営演習の授業において複数の町を見学し、町の多様性に気づくことができました。それぞれの町を見学する中で、その町が何に最も力を入れているのかが見えてくるようになったと思う。今まではどこかの町へ出かけても一観光客としての目線で町を見るだけで、その町がどのように観光客を集めようとしているのか知ろうとすることはなかった。しかし、地域経営演習の授業を通して、町の人の視点、訪問客の視点の両方が養われたように感じる。これらは地域のあり方を見つめ直すきっかけになったと思う。また、アンケート調査や3つの町それぞれに住む人の話を聞いて、実際にその町に住む人たちが自分たちの町をどのように思い、変えていきたいと考えているのかを知ることができたのは良かったと思う。同じ町に住む人たちの中でも町を活性化させたいという意見と、このままでよいという意見もあり、当たり前なことではあるが、一筋縄ではいかないのだということをしみじみと感じた。(後略)

青木 陽亮 | 地域経営学科 1回生 岐阜県立岐阜商業高等学校(岐阜県)出身

1年間平野先生と井上先生とのゼミに参加して、1番身についたのはコミュニケーション能力だと思います。その理由としては、灯籠づくりや綾部市の吉美小学校訪問で、作業や遊びを通して年の離れた年下の子と交流することができました。また、新町商店街のアンケート調査では、その地域に住む高齢者の人との交流、吹風舎でのろうあ者の方々との交流により、全世代の人と交流をしていく中で、その世代に合った話題や話し方などコミュニケーション能力が高くなったと実感しています。(中略)大学外の交流だけでなくゼミ内のメンバーとの交流も多く機会があり、様々な地域出身で様々な感性を持った人たちと目的を持って話し合いや作業をしているうちに仲良くなり、他人の話を聞く力、自分の意見を堂々と発言、感想文やレポートを書くことによる文章を書く力をこのゼミで身につけることができました。



三和地域の自然・歴史・文化に関するフィールドワーク

福知山市三和町の地域課題

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-B(1回生)

担当者名 矢口 芳生/中尾 誠二

演習の概要

旧天田郡三和町(2006年1月1日に福知山市へ編入)地域の課題について、三和地域協議会・福知山市三和支所および関係者の全面的な協力を賜り、ほぼ隔週でフィールドワークを行った。各回の実施日と内容は次の通り。①2018年4月26日(木)自然・文化。②5月17日(木)商業・医療。③5月31日(木)公共交通。④6月14日(木)工業誘致。⑤6月28日(木)ワーキングホリデー活用農業。⑥7月12日(木)公的観光施設。⑦10月4日(木)地元催事の歴史。⑧10月18日(木)地元催事参加準備。⑨11月1日(木)地元中との交流。⑩11月11日(日)地元催事参加。⑪12月13日(木)追加開取調査。⑫2019年1月10日(木)学校統合。⑬1月24日(木)現地報告会。



三和中学校との交流



三和フェスティバルへの出席

学生の気づき・コメント

旭 拓弥 | 地域経営学科 1回生 富山県立富山北部高等学校(富山県)出身

私は、この1年間を通して、2つのことについて学ぶことができました。一つ目は、問題提起を行う際に、原因へ視点を当てることについてだ。伝統文化や商工業といった多面的な視点から農村を見て、課題の源泉を問題提起することができた。例えば、大原神社における衰退の大本となる問題は、維持管理であるという提起ができた。よって、表明される課題ではなく、物事の原因に視点を置いた問題提起について学べた。二つ目は、定性的、定量的に述べることについてだ。定性的には、先行事例に基づいた慣習や、伝統を分析できた。定量的には、支出内訳や統計データを用いた数値による分析ができた。定性的であり、尚且つ定量的でもあることにより、根拠に基づいた内容になることについて学べた。最後に、今後は課題解決能力を身に付けたいと考えた。問題提起、分析について学ぶことができたため、これらを活用した5W1Hが明確な課題解決を行えるようになっていきたい。

細田 菜々子 | 地域経営学科 1回生 富山県立魚津高等学校(富山県)出身

私はこの1年間の三和町フィールドワークを通し、地域活性化の難しさを改めて感じることができました。その土地に住み暮らす人々の生の実態に聞くことで、資料だけでは分からない「問題点」に気が付けられることが多くありました。移住者受入の地域による賛否がその一つです。大学で様々な授業を受ける中で、「移住政策」はとても素敵なことのように思っていました。田舎暮らしをしたい人、空き家を活用したい人、人口を増やしたい地域、そんな要素がひとつになった「移住政策」は確かに魅力的に感じます。しかし実際に三和町で聞いた話は違いました。三和町、中でも大原地区では「空き家があったとしても、簡単にはよその人に渡せない」という意見が多かったのです。その時私は、地域政策を行う上で、地域の声をしっかりと聞くことの大切さを学びました。データだけでは伝わってこないその土地の問題点を理解できるように、住民の声を直接聞く学習をしたいと思いました。

井上 由真 | 地域経営学科 1回生 京都府立海洋高等学校(京都府)出身

私がこの1年三和町の学習を通して感じたことは2つある。まず一つは、何事も調べることが大切であるということだ。こうすればいいんじゃないかと、うわべだけを見て言うことは簡単だ。私も農業体験を積極的にすれば楽しいものになるなど最初も思っていたが、実際に話を聞くと栽培方法が外部に漏れたり、勝手に取られたり色々な事がありなかなか難しいということを知った。その他にも廃校舎の利用法や交通に関してなど多くの課題があるが、調べれば調べるほど面白い発見を行なっている例を知ることができた。課題も多く見つかった。このことから、何をやるにしてもまずは調べ、自分の知識を身につけることが前提であることを改めて感じた。二つ目は、地域の人のコミュニケーションの大切さである。上記の理由と被る点が多いが、地域の人がどう感じているのか、どうしたいのかを理解するにはこの方法なくしては無理だと感じた。そしてコミュニケーションを取ることで互いに協力することが増えるだろう。この2つの大切さを1年を通して痛感した。その上で今後の課題は、分野を問わず積極的にイベントや活動に参加する事である。参加する事で多くの人と関わり、価値観を共有していく事で自らの視野を広げることができると感じたからである。自由のきく学生に多くの経験を積み事で社会人になった自分の力になると考える。

水島 薫子 | 地域経営学科 1回生 福井県立鯖江高等学校(福井県)出身

この1年を通して2つの事に注目している。一つは、考え方の変化である。様々な面から三和町を見て、普段なら掘り下げないであろう分野にも触れてきた。その知識を土産に地元へ帰り、長年住んでいた町を見返すと、新しい地元の発見ができた。それは本当に些細なことだったが、この1年で、新たな見方ができるようになった自分の成長を嬉しく感じた。自分の意向だけにとらわれた見方ではなく、不意に感じたことから、芽づき式で調べていくことが少づつできるようになった。考え方が変化したことを利用し、今後、福知山などの他地域と地元を比べ、地元ならではの課題解決策を見つけたらいいなと考える。二つ目は、地域住民の誇りである。この1年、多くの先生の講義を受け、つくづく実感したことは、その地域に住んでいる人の思いが最終的に重要であるということ。しかし、誇りを持ってもらうことはそう易いことではない。そのため、誇りを持ってもらうためにはどう働きかけるべきか、また、その誇りをどう伝承・拡散していくかなど、今後試行錯誤していきたい。この1年で学んだことは多い且つ、大きい。1年で学んだことをそのまま片付けるのではなく、2年、3年とあらゆる形で利用しながら、今後の学びにつなげていきたい。



ボランティアとして復旧作業に参加

社会福祉協議会との協働から見た 地域の防災・居場所づくりの意義とその継続可能性

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-C(1回生) 担当者名 芦田 信之/星 雅丈

演習の概要

本クラスの演習は、福知山市社会福祉協議会(以下、社協)の全面協力の元、地域における「居場所づくり」と「地域防災」をテーマとして、学生を2チームに分けて実施した。

年度前半は、地域における高齢者サロン活動や地域の防災イベントなどに参加、および手伝いを体験することにより、地域における社協の役割と地域の福祉活動のニーズについて学んだ。また、今年度発生した福知山市内の自然災害に際し、ボランティアセンターの運営の中心に社協があることも、災害ボランティアの実体験を通じて学んだ。年度後半には、学園祭における地域の参加者のための居場所づくり、地域の祭事における防災グッズ提供、消防団への講習会などを社協、および地域の民生委員と協力して実施した。なお、今年度は台風や水害により、高齢者サロンによる地域イベントや地域の防災イベントが中止となり、地域に赴いての演習をいくつか体験できなかった。この点から、本演習を地域イベントに依存する形で組み立てることがいかに危ういかを痛感した。



HUGで避難所の運営を体験



静かなサロンで高齢者と交流

学生の気づき・コメント

一井愛哉 | 地域経営学科 1回生 京都府立宮津高等学校(京都府)出身

避難所の避難者の中には、重い病気を持っている人や、外国人、高齢者など様々な方がいる。HUG(Hinanzyo Unei Game:避難所運営ゲーム)は、その避難者を避難所施設に見立てた平面図に、どのように配置するか、また避難所で起こる様々なトラブルなどにどのように対応していくかを模擬体験するゲームである。この演習では、社会福祉協議会に赴き、何回かゲームを行うことがあったが、最初はルールが多すぎて大変戸惑った。しかし、ゲームを行っていく中で徐々にその意義を理解することができた。避難所を運営したことの私は、避難所を運営する難しさや大変さを理解することができた。また運営する側の視点から考えることで、万が一自分が避難した場合には、手助けできることがあると思う。子どもから高齢者まで、一度HUGを体験して多くの人に避難所の知識を身に付けてほしいと考える。

永松泰征 | 地域経営学科 1回生 大分県立高田高等学校(大分県)出身

サロンとは「家から一歩出る」ということである。家から出るのだから必ず何かの目的があり、家から出るということは「何を着ていこうか」「天気はいいだろうか」「忘れ物はないだろうか」と頭を使う。また、必ず誰かにあって、会話をする。サロンとは、公民館などの「場所」ではなく、家から出て誰かに合うといった「行動」だということがわかった。また、声をかけても出てこない、世話人の担い手がいない、定期的に行われる活動がマンネリ化してきているなど、サロン活動にもさまざまな課題があることを知った。サロン交流会の講師は、サロンの世話人は、まず「肩を上げる」ことが重要であることを強調した。サロンの世話人には、ニコニコした雰囲気づくりという役割があり、毎回苦労してアイデアを出すことが重要なわけではない。いつも肩を上げて暮らすことで、世話人をやりたい人が出るかもしれない。また、家から出てこない人が話しやすくなるかもしれない。「肩を上げる」ことを意識するだけでサロンが充実する可能性があることを学んだ。

大畑真鈴 | 地域経営学科 1回生 石川県立飯田高等学校(石川県)出身

兵庫医療大学の神崎先生による「避難所のあり方を考える」講演を受け、2つ驚いたことがあった。1つ目は避難生活で支援物資として食べ物配給されるが、それを取り置きすることで食中毒に繋がる危険性があるということである。2つ目は、支援物資はおにぎりやパンといった炭水化物中心になってしまうため、長期の避難生活になると肥満傾向になる人たちが多くなるということである。私は「避難することにはばかり取られて、避難してからに目を向けていなかったことに気づいた。この1年間、地域防災に触れ、私の中の防災意識はかなり高まったように感じる。この活動を始めるまで、「私は大丈夫だろう」この意識が少なからず自分の中にあっただけに思う。しかし7月豪雨で目の当たりにした風景は、今まで大規模な災害に遭わずに生きてきた私にとってかなり衝撃的であった。災害はいつ起こるか分からないから準備をしておかなければいけないとよく言われるが、自分も被災者になりうると考えているほうが防災意識の高まりに繋がると感じた。この機会を生かし同世代にも防災の大切さを伝えていきたい。

梅山萌 | 地域経営学科 1回生 愛知工業大学名電高等学校(愛知県)出身

防災メニューカフェでは、軽なお菓子とコーヒーなどの提供や、非常食の紹介を行った。地元の方たちが楽しそうにお茶をしながら交流でき、いい機会と場を提供できた。カフェの運営で最も感じたことは、小さい子どもの親の大変さだった。子どもたちは学生の何倍も元気で、学生がへとへとなっても「もう一回!」などと疲れている気配を感じさせなかった。無邪気な姿を見て和む反面、親の方は毎日子どもの相手をして本当に大変そうだった。疲れをとれる場がないと限界が来てしまう親御さんのもいのではないだろうか。子どもは親をよく見ている。親がいつも大変そうにしていたら、我慢をしよう、あるいは良い関係を築けなくなってしまう可能性もある。社会福祉協議会が支援を行っている母子・父子家庭は、特に一人で負い過ぎてしまいがちで、疲れがたまりやすいものと考え、地域の方たちが温かく見守り助け合うことが大切である。そして悩みを相談しやすい場所を必要としている人がたくさんいるのではないかと感じた機会になった。



商店街で多世代交流を試みる「遊ビバ」の実験

地域社会の問題解決を試みる小さな社会実験 ～内田町自治会、新町商店街をフィールドに～

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-D(1回生) 担当者名 谷口 知弘/加藤 好雄

演習の概要

春は大学が立地する大正小学校区及びまちかどキャンパス吹風舎を設置した新町商店街をフィールドに、自治活動と商店街活動の実際を活動への参加やフィールドワークを通して体験した。秋からは自治会チーム(「内田町自治会」×「遊び/防災」→緩やかにつながる多世代交流)と商店街チーム(「新町商店街」×「若者」→「新たなにぎわい」づくり)をつくり活動した。「集める(Resarch)」→「企てる(Plan)」→「創る(Prototyping)」→「振り返る(Check/Action)」のプロセスで問題解決の小さな試みを実践した。自治会チームは、内田町自治会に参画しハザードマップの作成や防災食の改善提案に取り組んだ。商店街チームは、元家具店の店舗を活用し大学生と子どもや地域住民が遊びを通して交流する「遊ビバ」を運営した。



大正文化センター聞き取り調査 「遊ビバ」での学生と子どもの交流



まちかどキャンパス吹風舎での演習の様子 内田町自治会防災訓練での防災食を考えるワークショップ

学生の気づき・コメント

中島 龍也 | 地域経営学科 1回生 岡山県立岡山商業高等学校(岡山県)出身

我々は防災に対する知識も地域の知識も「0」に近かった。その状態で地域の防災に取り組むにあたって、防災に関わる知識は、学生が防災の取り組みをした事例を学ぶことから始めた。また、地域の知識については自治会訪問や公民館訪問などで学んでいった。その中で、全て自分ひとりで取り組むのではなく、みんなの知識や考えを合わせてより良いものを作ることが大切であることを学んだ。本演習を通して、地域の方の福知山への思いや我々大学生に期待して下さっている事、また大学生が地域に与える力や刺激は非常に大きいものだと感じた。約一年間自治会の防災活動に協力して見て、実際に触れ合う事、意見を交わすことの大切さを学ぶことができ、近い未来の自分像が見えたような気がする。これから、地域をみんなで支えより明るく活発なものにしていけるような学生生活を送りたい。

武山 征広 | 医療福祉経営学科 1回生 兵庫県立柏原高等学校(兵庫県)出身

活動を振り返って、プロジェクトの方向性を決める時、なかなか決まらずすごく不安だった。でも方向性が決まって実際に活動するにつれ何をすべきかが見えてきて積極的に行動できるようになった。苦労したことは安全面の確保だ。子供たちが走り回ったりするので怪我をしないように卓球台の角や机の角を保護したり、部屋のレイアウトを変えたりといろいろ工夫をした。小さい子供の視点になって考えること、視点を換えることというのを見てくるものがあることを学んだ。この演習で学んだことは、実際に活動することの難しさや振り返りの重要性だ。計画の段階で予定していたことができなかったり、逆に予定していないことが必要になったりと実際にフィールドに出て活動することでしかわからないことがあるということも学んだ。また、活動ごとにKeepとProblemを振り返りTryを考えることで、次の活動がより良いものになるので振り返りはとても重要だと思った。今後の学校生活では、学んだことや、感じたことを自分の中で振り返りをする習慣を身に付けていきたいと思った。

野々村 恭大 | 地域経営学科 1回生 島根県立松江東高等学校(島根県)出身

今期の学生生活を振り返ると、私たちはかなり「自由」にプロジェクトを行っていたと思う。それゆえ、私たちは見えない規則に縛られることなく「やりたいこと」を考え、それをどうしたら「実行」できるのかという一番難しい箇所をグループみんなが率先して行動できたことが一番の成果であると思う。しかし、今回のプロジェクトの成功を収めることが出来たのは、私たちだけの取り組みだけではなく、今回協力頂いた「内田町自治会の皆様・市役所の皆様」の支援や助言があったことで私たちはうまく進むことができた心の底から思う。今回の活動で、私は「積極的に行動」というものがとても鍛えられた。この活動で培った知識を、来年度のゼミ活動においてこれらを教訓にし、より率先して動ける人間になりたい。

肥塚 里於 | 地域経営学科 1回生 賢明女子学院高等学校(兵庫県)出身

「遊ビバ」の取り組みはとても楽しく良い経験となった。初回、子どもたちが本当に来てくれるのかと不安と期待がいっぱいだった。数は少ないながらも小学生が来てくれたうれしかった。初めは様々な問題に直面した。その都度お互い意見を出し合い少しずつ改善した。実践しながら改善を重ね、周りにも評価を求める方法は、椅子に座り何時間も考え込むよりも新しい発見や生の声を生かすことができることに気づいた。福知山ワンダーマーケットでの「遊ビバ」はとても良いものだった。親と一緒に子どもが遊ぶ姿、大人もたくさん来てくださった。多世代が一方所に集まり遊び、話し、自然と交流が生まれた。継続開催の希望の声もいただいた。ぜひ実現できたらと思う。一年間の演習を通して、何度も人との交流の大切さに気づかされた。一人ひとりの意見は、何が正しい、間違っているというのではなく、その人の性格や考え方、趣向を表してその人を深く理解するためのエッセンスであるということが分かった。新しいものの考え方に触れることによって今までの自分を振り返ることもできた。この気づきを大切に、自分自身の考えをしっかりと持てるようにこれからも努力したい。



PBL(プロジェクトベースドラーニング)から考える福知山の公共経営

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-E(1回生)

担当者名 杉岡 秀紀/三好 ゆう

演習の概要

本演習では、「PBLから考える福知山の公共経営」をテーマに1年間演習を行った。具体的には、17名の受講生を、①ゆらのガーデンにぎわいプロジェクト(パートナー:福知山まちづくり会社、福知山ガーデニングサークルゆらら)、②京都府中丹西土木事務所PV作成プロジェクト(パートナー:京都府中丹西土木事務所)、③弘法川調節池利活用プロジェクト(パートナー:同上)の3グループに分け、活動を展開した。いずれもテーマをパートナーから頂き、パートナーからの情報提供や現地でのフィールドワークを経て、提言を行うと共に、成果物も創作した。また、全体の活動として経済界や他大学生、高校との対話事業も実施した。



学生の気づき・コメント

水田 嶺央 | 地域経営学科 1回生 兵庫県立村岡高等学校(兵庫県)出身

このプロジェクトではゆらのガーデンをフィールドに、ガーデンの更なる活性化を考え活動しました。トルソーの土台を作るために事前に数回に分けて作業をし、同時にトルソー本体のデザイン案を考えました。理想を練り作業をしてそれが現実的に可能かを考えることがとても面白かったです。実際にトルソー本体の作業をする中で地域の方々のアドバイスを頂き、理想と現実が離れていることがありました。もう一度再考しないといけないなど大変な思いをしましたが、完成していくところを間近で見るととても楽しくモチベーションが上がりました。今回の演習で目的のフィールドの状況を確認し常に現実的に可能かを考え、そしてまた作業をし現実を持っていくというローテーションが大切なことだと経験から学びました。この経験を生かし自分が行っている活動をより精度の高いものにしていきたいです。今回の演習で仲間になれた方々の縁も大事にしたいです。

平井 優衣 | 医療福祉経営学科 1回生 鳥取県立鳥取西高等学校(鳥取県)出身

一年間を通して、弘法川調節池の平常時の活用方法について考えてきました。福知山市に引越してから実際に豪雨を経験したり、活動を通して福知山市の水害についても学ぶことができました。地域の方、行政職員、学生を交えたワークショップにも参加させて頂きました。そこでは、学生だけでは思いつかないような、水害を経験しておられる地域の方ならではの意見も聞くことができ、アイデアを出す際の視野が広がったと思います。しかし、地域からの申し出により、ワークショップが中止となり、地域と関わっていくことの難しさを感じました。プロジェクトは全てがうまくいくという訳ではなく、お互いの理解が合致してから進めていくことが重要だということがわかりました。ワークショップで話を振られた時に、話す内容をうまくまとめて発言することができなかったため、これからは、地域の方にも自分の意見をしっかりと伝える力を身につけていきたいです。

山品 達哉 | 地域経営学科 1回生 福井県立武生東高等学校(福井県)出身

私のプロジェクトでは、ゆらのガーデンの活性化のために一年間活動しました。企画としては、福知山まちづくり会社とゆらのガーデンのガーデニングサークルゆららの方々と協働し、「若人チャレンジ事業」として、お花を使ったトルソーづくりの制作を行いました。前期は座学が多く、外に出て体験することが少なかったのですが、後期の活動からはガーデニングをしてみるところから始めて、実際に肌で感じて体験することが多くなり、完成に向けて少しずつ達成感を感じることができました。この一年間の活動から、ゆらのガーデンは水害の被害を受けやすいなどの課題がある一方、福知山市の魅力な場所の一つであるという面も兼ね備えていることがわかりました。私たちの活動を通じて、少しでもゆらのガーデンの認知度が高まり、ガーデンを訪れる観光客が増えれば、僕たちの活動はよい風を起こしたと思います。

大橋 帝我 | 地域経営学科 1回生 福井県立高志高等学校(福井県)出身

私のプロジェクトでは、京都府の土木職員の求職者を増やすためのPR動画を作成するために活動してきました。京都府の土木職員は現在、人手不足で将来の技術職員不足が懸念されています。この問題を解消する一つの手立てとしてPR動画に注目したという訳です。従来のPR動画では、土木の仕事内容を単に説明するだけの、いわばつまらないPVが多かったのですが、私たちが作成したPVは、女性でも活躍できる、あまり知識がなくても現場で覚えていくことができる、といった部分に注目しました。前期は土木事務所の方が災害の復旧作業で忙しかつたのでなかなかコミュニケーションが取れなかったのですが、後期になってから体験した土木事務所のインターンで、「自分がした仕事の痕跡が地図に残り達成感を得ることができる」このことが土木の魅力なんだと気付きました。私たちが作成したPVが今後の土木業界の職員増加につながれば幸いです。



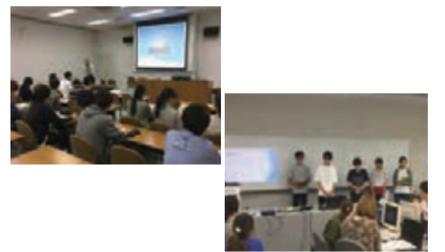
福知山市大江町の地域課題を分析する

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-F(1回生)

担当者名 齋藤 達弘/佐藤 充

演習の概要

本クラスの演習は、社会調査の手法に基づき、地域の現場に赴いて観察し、地域課題を深く理解することが目的であった。一年を通して、フィールドワークのプロセスを経験し、地域課題を分析するための姿勢と基礎的なスキルの習得を目指した。学生は、大江町の地域課題を題材にして、①大江町の移住・定住対策、②大江高校と地域づくり、③由良川と水害の3つのグループに分かれ、文献調査や現地調査に取り組んだ。特に、後期からは、学生主体の調査活動が中心となり、グループワークと担当教員との対話が演習時の取り組みとなった。こうした調査活動から得られた結果は、現地での成果発表会(2019年1月)において、地域の方々に報告された。



学生の気づき・コメント

加藤 颯一郎 | 地域経営学科 1回生 新潟県立長岡向陵高等学校(新潟県)出身

地域経営演習では、調査をすることの難しさを感じた。大学入学前は、調べ学習といっても辞書で少し調べて、ネット検索をする程度だった。しかし、この演習では、それだけではなく、図書館の文献を探して調べ、インターネットのサイトを使って資料を探した。さらに、それでもわからないことは実際に現地に行ってインタビューなどを行った。これまでインタビュー調査を行ったことがなかったので、さまざまな気づきが得られた。例えば、相手の話に合わせての大切さだ。インタビューでは自分たちの話だけでなく、インタビューを受けてくれる方に対して配慮することで、それ以降のインタビューがスムーズになると感じた。2回生では、自身の興味がある分野について学ぶので、自分から積極的に学習を進めていきたいと思う。今年度は、グループのメンバーに言われたことや課題をこなすことが多かったが、2回生になってからは自ら進んで学習したい。

松本 優華 | 医療福祉経営学科 1回生 三重県立桑名西高等学校(三重県)出身

この一年で、「調査活動」はとても根気のいる取り組みであると身をもって知った。それは、情報を集めて事実関係を確認し、それらを整理することがいかに大変かを知ることだった。外に出なくてもさまざまな資料が手に入る時代だからこそ、本当に欲しい情報にたどり着くまでが遠く感じることもあった。そのおかげか、情報の取捨選択する力もわずかながら身に付いたように思う。また、この演習を通して、「地域の課題」と一括りに言っても、その「課題」は多岐にわたり、様々な問題が複雑に絡み合っているのだとよくわかった。だから、それらの課題に対して『こうすればいい』と安易に提案できるものではないとも思うようになった。問題が複雑に絡み合っているからこそ、慎重さも必要だと私は思う。このような思考になるのは、事実を凝視することにこだわり続けた一年があるからである。そういう意味で、地域経営演習はとても有意義で贅沢な時間だったと思う。

高川 悠奈 | 地域経営学科 1回生 石川県立金沢桜丘高等学校(石川県)出身

この一年間を通して、何かに対してインタビュー調査をするときには、最初に下準備をしておくことが大切であることを実感できた。インタビュー相手に関心のある程度の知識と興味を持つことで、インタビューしたときに、相手も話しやすくなって、会話を盛り上げることができた。そうしたなかで、質問の回答だけではなく、プラスアルファの情報を入手できるチャンスも大きくなったと感じた。2回生になったときにも、調査の下準備を忘れずに行きたくらうと思った。また、プレゼンするときには、自らが発表する内容に責任を持たなければいけないことも学んだ。どのような質問が投げかけられるか想定して、それにしっかり答えられるように、どんどん掘り下げて調べていくことも大切であった。この点が、1回生では十分にできなかったため、2回生では意識して取り組んでいこうと思った。

森山 佳亮 | 地域経営学科 1回生 大分県立中津南高等学校(大分県)出身

当初、地域経営演習という科目は頻りに地域に出て、地域の方と関わりながら、その地域の問題について考えるものだと思っていたが、このクラスはあまり地域に出ないと思って内心残念な気持ちになった。初めの頃は、調べ方やパワーポイントの作り方も分からず、本当に発表できるようになるのかと焦っていた。しかし、回を重ねることに調べ方やまとめ方が分かり、図や表も手際よく作れるようになった。また、事前に調べたことで、インタビュー相手の話している内容が分かり、非常に理解しやすかった。そこで、事前に調べることの大切さを知った。何も知らない状態で地域に出て、得られるものは少ないと思った。さらに、事前に調べておくことで、次の調査につなげられると実感した。事前に調べなくても、すぐ地域に出たいと思っていた最初の頃の自分が少し恥ずかしくなった。調べることは、大変ではあったが確実に力がついたと実感できる。この調べることの大切さを他のクラスの人にも還元できたらよいと思った。

地域の魅力を高める産業活動・交流活動への参加

科目名 地域経営演習Ⅲ-A

担当者名 平野 真



演習の概要

学生が、地域産業活性化のための活動企画をたて、実施した。

- 1) 伝統工芸の素晴らしさを多くの観光客に伝え、体験ツアーなどに参加してもらう為、プロモーション・ビデオを製作する。企業に、観光用ツールの一環として採用してもらえないか提案する。
- 2) 北近畿各地の地酒をテーマにカルタを作り、カルタを製品として販売し、土産物として観光にも資することを考える。試作品の提案を行い、企業に商品としての訴求力があるか、ご意見を伺う。
- 3) まちかどキャンパスを活用して、地域の子供達や高齢者の方々と、昔遊びをしながら交流をはかる。

発表会を開催し企業や地域の方々に来ていただき、作品や活動に対して御意見をいただき、学習の糧とした。



農村の暮らしを知る

科目名 地域経営演習Ⅲ-B

担当者名 矢口 芳生



演習の概要

この演習の目的は、農業・農村・暮らしとは何か、田舎や田舎暮らしの「よさ」「新しい農村の価値」等、何かを感じ取ってもらうこと、各自の課題を見出すことであった。

クラスは8名。座学では日本と世界の農業について、とくに日本農業・農村の課題について学んだ。現場(三和町T集落)では人口減少・高齢化・担い手不足を目の当たりにしたが、同時に、タケノコ掘りやバーベキューなど楽しい都市住民(大阪市都島区)との交流もあれば、自然のサイクルとともに暮らすマイペースの毎日があった。その体験もした。また、三和町菟原地区の自然・社会・文化の実態、農業・農村の現状と課題について学び、その将来について地区の方々とともに考え、討論し、発表し、さらに交流を深めた。



夜久野町における文化資料のデジタルアーカイブ化

科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-G(1回生)

担当者名 神谷 達夫 / 江上 直樹

演習の概要

本演習は、福知山市夜久野町をフィールドとし、夜久野町における文化資料のデジタルアーカイブ化の作業を通して、文献調査・実地調査の基礎について習得することを目的に実施した。前期では、文献およびフィールドワークから夜久野町の現状についてその概況を把握するとともに、他地域のデジタルアーカイブ化の先行事例について「文献資料」「有形文化財」「無形文化財」という3点を軸に収集・整理を行った。後期には、前期に収集した先行事例を参考にしつつ、「文献資料」においては夜久野町に関連した論文リストおよび本文へのリンク集、「有形文化財」については「夜久野高原八十八ヶ所石仏」の写真および位置情報データ、「無形文化財」については「額田のダシ祭り」の映像データについてそれぞれ収集し整理を行った。



学生の気づき・コメント

北村 洋翔 | 地域経営学科 1回生 滋賀県立八日市高等学校(滋賀県)出身

地域経営演習では、夜久野町へのフィールドワーク及び文化財のデジタル・アーカイブ化への取り組みから多くのことを学びました。フィールドワークは、初めてでなれない作業も多く大変でした。現地での資料収集においては不備が多く、一回や二回の調査では、その町について深く知ることができず既存の資料に頼ることが多かったです。フィールドワークをする前には、思わなかったこともいざ集めた資料をまとめようとするときにこうしておけばよかったなど後悔することも多々ありました。事前準備がいかに大事かわかりました。事前準備をどれだけしっかり行うかによって当日のフィールドワークの質も変わってきます。一回のフィールドワークでどれだけ資料を得ることができるのか、より良いデータを手にすることができるかは事前準備や下調べにかかってくると思います。二回生からは気をつけたいです。

中島 みやぎ | 医療福祉経営学科 1回生 富山県立南砺砺野高等学校(富山県)出身

地域への視察、調査等、フィールドワークを伴う授業がほかの授業とは違うと感じ、印象に残っています。夜久野の額田まつりを対象に記録や編集等の、今までに経験のない作業をしました。祭りに参加させてもらうことで得たデータからは、現地の人々の祭りへの愛着と興奮が感じられました。現地の人々のための祭りであるからには、現地で同じように祭りを楽しむことでしか、祭りや人々の関係が分からないことを知ることができました。地域の文化を、観光のためとか、PRだとか他の地域との比較とかではなく、現地の人々とをつなぐためであることを、私は今まで知らなかったように思います。地域経営演習でのフィールドワーク経験から、地域の文化と人々に対しての関心がより深められました。現地の立場に立って考えた経験を、今後も生かしていけるようになりたいです。

小林 勇斗 | 地域経営学科 1回生 岐阜県立加茂高等学校(岐阜県)出身

私は1年間演習をとおして学んだのは大学で勉強するとはどのような物であるかということ。高校までのように教えられて学ぶと言うよりは、自らが調べたり、作り出して学んでいくという姿勢が大学での勉強だと感じた。一年間で特に心に残っているのはやはりデジタルアーカイブを作る作業である。クラスのみならず各担当に別れ、それを集結させサイトを作った。私は様々な文献をまとめる作業をしたが、未来の研究のための準備をするための物を作り出すという作業はとても新鮮だった。またこの作業をしたことで、今後の研究や、レポートを書くときなど、参考文献を探すのや、まとめたりするのに役立てることが出来ると思う。来年度からは自分の興味がある分野でゼミに入り、勉強していくことになる。今年特定の分野について深くは学べなかったが、次年度からはより深く自分の学びたいことを知ることが出来るようにしていきたい。

池上 永莉 | 医療福祉経営学科 1回生 福井県立三国高等学校(福井県)出身

私は医療福祉経営学科なのですが、この演習を通して、地域経営学科の生徒の子と交流を持ち、一緒に学ぶことができたのでよかったです。人脈も広がり、同じ目標に向かって学ぶこの授業は、とても良い経験になりました。夜久野を記録するという事で、額田祭に参加させていただいたことが印象に残っています。全然知らない土地の祭りに足を踏み入れることは少し緊張したけれど、地元の方と同じ法被を着て、休憩所では同じようにお菓子やお寿司をもらい、一緒に山車を回したことで、祭りの熱量をとても近くで感じることができました。初めて夜久野に来たときは、あまりお店もなく、静かな印象でした。でも、この演習で住民の方々と触れ合うことにより、夜久野を盛り上げようという熱意が伝わってきました。この一年間の経験を通して、地域の活性化は自分たちだけで考えるのではなく、地元の方の話を聞き、寄り添って一緒に盛り上げていく力が必要だと感じました。

近隣自治体から学ぶ公共政策と地域創生 ～朝来市梁瀬地区におけるフィールドワークを中心に～

科目名 地域経営演習Ⅲ-E

担当者名 杉岡 秀紀



演習の概要

本演習は、大きく文献輪読とフィールドワークの二本立てとし、学問の基礎を学びつつ、地域に出て、実践力の基礎を培った。
具体的には、文献輪読は指定図書を毎回一人ずつ発表する形式をとり、公共政策の基礎を学んだ。次にフィールドワークは、朝来市(梁瀬地区)に入り、市職員をゲスト講師に招いての講義、現地訪問(ヒアリング調査)、調査(高校生・中学生・小学生)を重ねた。また、後学期は、半年間の学びを学生プロジェクトに引き継ぎ、学生の主体性に基づき、朝来市(梁瀬地区)を題材にした「やなせA to Z」の制作に取り組んだ。
その他、福知山のまちづくりミーティングや経済界や高校生との対話事業にも参加した。



知恵を集めて未来をつくる場「ワークショップ」の理論と実践を学ぶ ～ワークショップ「暮らしとまちを見直す井戸端会議」の開催を通して～

科目名 地域経営演習Ⅲ-C

担当者名 谷口 知弘



演習の概要

前半は、ワークショップの基本的な理論と技法を学ぶことに重点をおき、ワークショップを体験しながら理解を深めた。後半では、日々の暮らしや地域を見つめ直し、共通する関心のテーマで4つのチームを作り、地域と協働でワークショップ「暮らしとまちを見直す井戸端会議」を開催し実践力を養った。

次の4つのテーマ、4つのチームで実施した。

- 握って語っておにぎりワークショップ(食)
- 光秀知とこスタンプラリー発案ワークショップ(歴史)
- ドッコイセと腰を上げてドッコイセの未来を考えよう(祭)
- 空き家を地域資源に!～学生×地域でつくりだす〇〇空間(空間)

ワークショップの実践を通して多様な価値観や世代が集い話し合うこと、知恵を集めることの重要性と可能性を学んだ。



地域活性化に取り組む多自然圏での参与観察調査

科目名 地域経営演習Ⅲ-D

担当者名 中尾 誠二



演習の概要

多自然圏(≒農山漁村)では、地域活性化を目指してグリーンツーリズム等をはじめ様々な取り組みが展開されている。当演習では、これら地域の催事等へ参加して現場での聞き取り調査・事前学習・事後レポート作成・発表を行った。各回の実施日と内容は次の通り。①2018年5月12日(土)～13日(日)福知山市大江町「毛原の棚田taikanツアー田植え会」前日準備・公民館等へ集団宿泊&当日運営。②5月27日(日)福知山市三和町「うぶやの里の御田植祭」当日参加。③6月23日(土)～24日(日)豊岡市出石町「奥山ほたる祭」当日運営・古民家改修施設等へ集団宿泊。④7月19日(木)～20日(金)福知山市三和町「教育民泊モニター」として計5軒の家庭に分宿。



教育行政の基本理念と諸制度について

科目名 地域経営演習Ⅲ-F

担当者名 江上 直樹



演習の概要

本演習では、教育行政の基本理念と諸制度について教育行政学の専門書の輪読を通じて学ぶとともに、履修者各自が関心のある教育問題についてテーマを設定し、先行研究についてまとめつつレポートの作成を行った。教育という営みは現代社会で生活するうえで誰もが経験するものであり、教育問題について思索する際に自身の経験のみをその根拠として議論を行うものも少なくない。本演習は、教育法規や諸制度について基本的な知識を身に付けるとともに、先行研究等を引用しつつ、多様な根拠をもって教育問題について考察できる力を身に付けることを目的に上記の取り組みを実施した。



イノベーションによる地域活性化の可能性検討

科目名 地域経営演習Ⅲ-J

担当者名 神谷 達夫



演習の概要

本演習では、イノベーションによる地域活性化を検討するために、①イベントの企画(夜久野町のイベントの検討、福知山イルミネーション 福知山イル未来と2018に出展)②イベントに使用する装置の検討(和紙灯籠のコンピュータ制御、スピーカーの実験)、③地元産品を応用した新製品の検討に取り組んだ。その結果、それぞれの取り組みにおいて、学生らは非常に積極的に取り組み、試作品を作る以上の成果を上げることができた。特に、福知山イル未来と2018においては、学生らがプロジェクションマッピングを展示し、好評であった。また、新製品開発においては、漆塗りラジオを試作し、今後の新製品検討の基礎となる成果を得ることができた。



観光地経営の観点から海の京都観光圏を考える

科目名 地域経営演習Ⅲ-G

担当者名 佐藤 充



演習の概要

本演習は、観光分野の学術的な文献から理論的な枠組みを理解し、また社会調査の手法を用いて、観光地の現状と問題点を分析することが目的であった。半年間を通じて、まず、観光学や観光地経営に関する基礎的な文献を輪読した。その上で、統計資料の収集や訪問調査を行い、各自の視点から、海の京都観光圏における観光の現状と課題を明らかにした。学生は、購読文献のレジュメ作成・報告という個人ワークを行うとともに、海の京都観光圏の周遊プラン立案・提案というグループワークに取り組んでもらった。なお、提案された周遊プランはゼミ内で実施され、海の京都観光圏の観光資源の把握に努めた。



中国語能力のレベルアップと地域観光への実践

科目名 地域経営演習Ⅲ-K

担当者名 張 明軍



演習の概要

グローバル人材に求められる中国語能力を育成するため、本演習ゼミでは、①ゼミ生の個別研究発表を通じて、より深く中国の全般を理解する。②発音の訂正、単語、文法の学習も含めて、HSK(国際漢語試験)の受験対策を遂行し、HSK受験を勧める。③地方観光地における中国語観光案内実践を通じて、中国語能力の応用を実現し、中国語圏観光客の誘致に必要な受け入れ対策や気付きなどをまとめる。この三つの項目を実施し、「アリバイ、シェアバイク等」の現代中国の社会現象を纏められ、理解を深めた。2名のゼミ生がHSK試験を受け、三級に合格したが、今後より多くのゼミ生が三級、四級に合格するように指導する。中国人との観光案内実践を通じて、中国語の応用練習もでき、舟屋群で有名である伊根町のインバウンド観光の受入課題をゼミ生達の視点でまとめた。ビデオ資料: YouTubeで「中国観光案内実践 伊根編」で検索。



福知山市在住高齢者の医療と健康に関わる調査

科目名 地域経営演習Ⅲ-I

担当者名 佐藤 恵



演習の概要

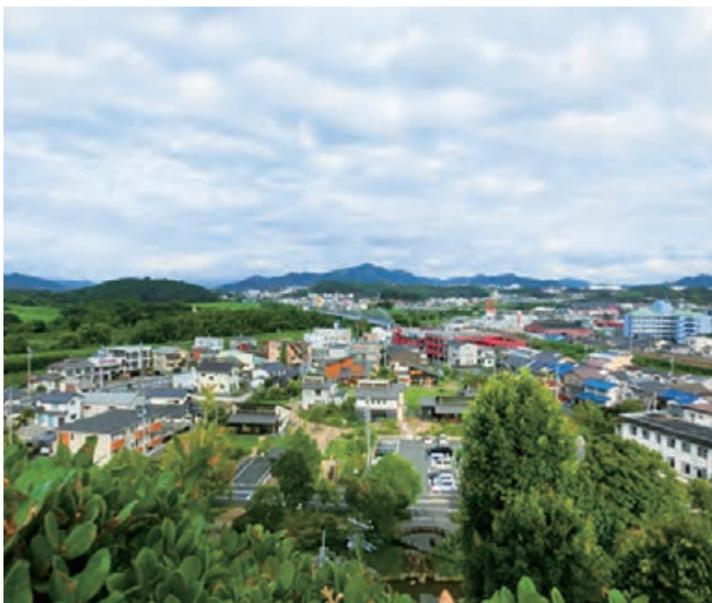
医療と健康に関するアンケート調査を企画した。対象は、市内65歳以上74歳以下の住民600名である。学生は、質問紙を郵送して回収する調査を立案し、福知山市への協力依頼を行い、それを得ることを実現した。また、調査実施のための倫理審査申請の過程も実習した。具体的には、地方の医療や健康に関する先行研究などを調べて仮説を立て、それを基に質問紙の設計をした。また、倫理審査申請に係る参加者への説明文書や同意書などを作成した。2度にわたる水害被害のため、発送がずれ込んだが、新たに学生プロジェクトを立ち上げたのち、調査を実施した。229通の回答を得て、現在はデータ分析に取り組んでいる。



地域社会の課題にアプローチする道筋を体験する

科目名 地域経営演習Ⅳ-A

担当者名 富野 暉一郎



演習の概要

本演習では、受講者の希望する分野(行政・地域交流・観光)の3グループによるグループ活動と、グループ全体で取り組む地域課題研究を並行して実施した。全体では、北近畿地域連携会議と連携して、福知山市における公共交通(バス)に関する地域課題をとりあげ、市の財政支出の全体像の調査やバス利用者へのアンケート調査、およびタクシー事業者に対するヒアリングを行った。またグループ活動では、行政グループが京丹波町の議会基本条例策定に関連して、議会の町内の各施設の見学を実施した。地域交流グループは、丹波生活衣館の活動内容を調査し、その活動に参加しながら和装の課題や可能性を検討した。さらに観光グループは、インバウンド観光の消費行動をテーマに、宮津市においてアンケート調査を実施した。

ロジスティクスに関する事例研究

科目名 地域経営演習Ⅳ-C

担当者名 篠原 正人



演習の概要

「ロジスティクス論」の授業と並行して、実践的な内容を付加することを基本とした。授業で学んだことが、実社会でどのように動いているか、そして課題は何かを解明することを目的に、新聞・雑誌等の記事を用いて考察し、3、4人のグループによる研究発表を行った。

gretl(グレーテル)による計量経済学

科目名 地域経営演習Ⅳ-B

担当者名 齋藤 達弘



演習の概要

gretl(グレーテル)とは統計分析のフリーソフトの一つである。この演習では、教科書(田中隆一『計量経済学の第一歩』有斐閣、2015年)を輪読して、計量経済学の基礎理論を学習しつつ、gretlにより練習問題を演習した。古典的回帰モデル(ガウス・マルコフ定理)の後、モデルの定式化、多重共線性、不均一分散と進み、ダミー変数や交差項を含む重回帰分析までを学習した。エビデンスを得るための実践的データ分析のためには、より拡張した分析手法の習得が必要となる。

公共政策としての「まちづくり政策—その具現化のための手法、道具づくり」

科目名 地域経営演習Ⅳ-D

担当者名 福島 貞道



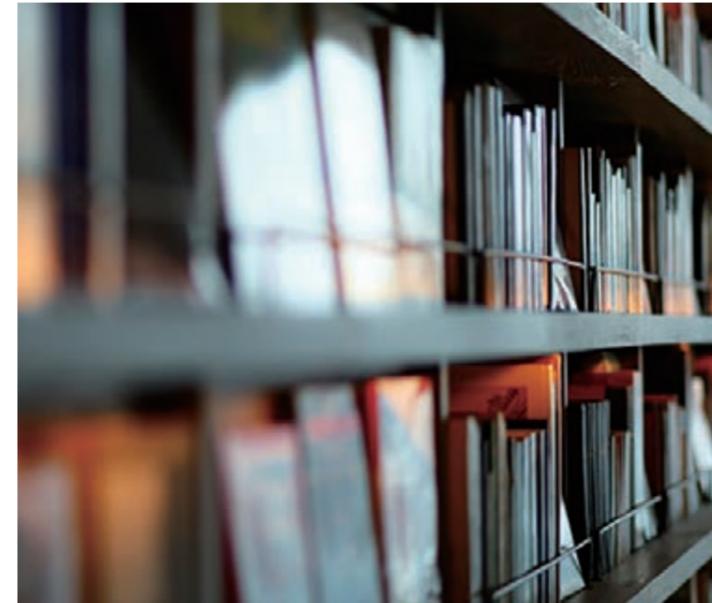
演習の概要

このゼミは、自治体経営(まちづくり)を主眼に置き、公共政策の実務において必須となる感性、並びに知識及びスキルの基礎を、放談形式の中で習得しようとしたものである。前半で、法治国家の基本となる「法の概念」等を学び、各々が考えるまちづくりに関する課題を出し合うとともに、まちづくりに関するタイムリーな新聞記事を活用し、そこに生じている問題点とその原因等を探り、その解消に有効な法の仕組み等について学んだ。後半では、法務として重要な条例制定の基礎的知識に触れることを目的に仮想的な団体を想定した規約作りの基本を実習した。

わが国の租税制度を理解する

科目名 地域経営演習Ⅳ-G

担当者名 三好 ゆう



演習の概要

本演習の目的は、①わが国の租税制度における「課題発見(=論点の抽出)」と「解決方法の提案(=立法論の提示)」の際に必須となる基礎的知識を、数冊の専門書と先行研究論文の輪読により現行制度を正確に把握すること、②各税目でどのような論点が挙げられているかを理解すること、にあった。とりわけ国際課税の分野に関心が集まり、海外の判例を通じて複雑な課税関係ならびに国境を超えての租税競争が激化している現状を理解したうえで、新たな研究テーマを見出す学生が多くいた。また消費税の回では、軽減税率導入後の用途について、高齢社会を視野に入れた有用性の高い提案がいくつか出され、有意義な学習時間であったといえる。

非財務情報を活用した定量的・定性的分析による地域課題の把握と解決策の検討

科目名 地域経営演習Ⅳ-E

担当者名 井上 直樹



演習の概要

地域経営演習Ⅳの前半では、福知山市の現状と課題を定量的に把握するため、パソコン教室でRESAS(地域経済分析システム)を使った演習を行った。

後半では、福知山市の市議会議員および市職員に市の施策の進め方、まちづくりの課題などについて講演を依頼し、地域の課題を理解した。また、福知山市議会予算審査委員会および長田野工業団地を訪問し、担当者から市議会や長田野工業団地の概要、福知山市経済の課題、福知山へ本社を移転された経緯などについて聞き取り調査を行った。

まとめとして、近畿経済産業局のRESAS担当者を招へいし、講演や聞き取り調査による定性的な分析とRESASによる定量的な分析をもとに地域課題の解決策を検討した。



身近に感じる「問い」を明らかにすることで、専門研究のテーマを意識する

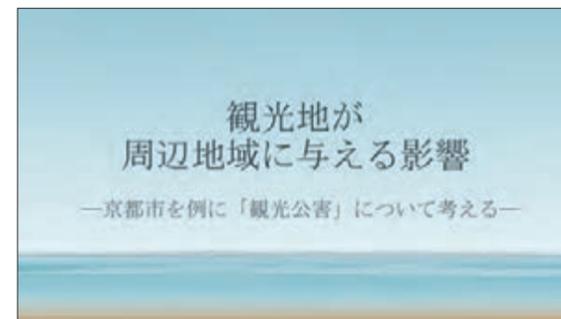
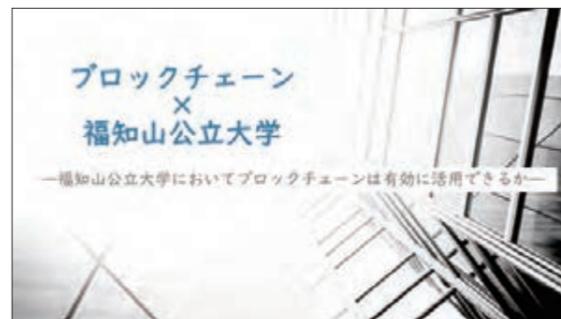
科目名 地域経営演習Ⅳ-F

担当者名 加藤 好雄

演習の概要

近年、社会や企業が求める最も必要な能力として「複雑な課題解決能力」が挙げられるが、この能力に必要なものとして思考法や経営学・マーケティングの知識をベースとした課題解決の手法がある。その解決策は客観的な根拠(データ)に基づいていなければならない、そのために必要なのがデータ分析の知識・能力になる。

本授業では、課題解決に必要なことを学ぶための入門として思考法や事例(ケース)における課題解決の手法、データ分析の基礎概念を学ぶ。最終的には、身近に感じる「問い」を明らかにする個人テーマでの研究発表を行うことで、習得した知識・能力の定着を図った。



「エクス系移住」～全国の「移住熱源」の可視化と編集による価値創出

科目名 地域経営演習Ⅳ-H

担当者名 塩見 直紀



演習の概要

古代から「丹波漆」で有名な夜久野に、漆芸を志す人が移住する。そうした「漆移住」の事例が夜久野にはある。聖地的な場所に、それが天職・ミッションとする人が移住することを「エクス系移住」と命名。京都府事例(市町村単位)、全国事例(47都道府県、市町村単位)を17名が出身県を含む担当県を決め、調査をおこなった。集まった膨大な全国事例を独自の17の切り口で編集。いま地域(地方)に足りない能力、今後も重要な能力とされる「編集力」をつける課題にチャレンジした。計画当初より全国出版、全国発信チャレンジを目標にしている。今回の成果は、地方自治体や出版社やテレビ局等への企画提案に活用していく。集まったデータは、アイデアと行動力次第で、今後も価値を創造し続けることが可能となる。



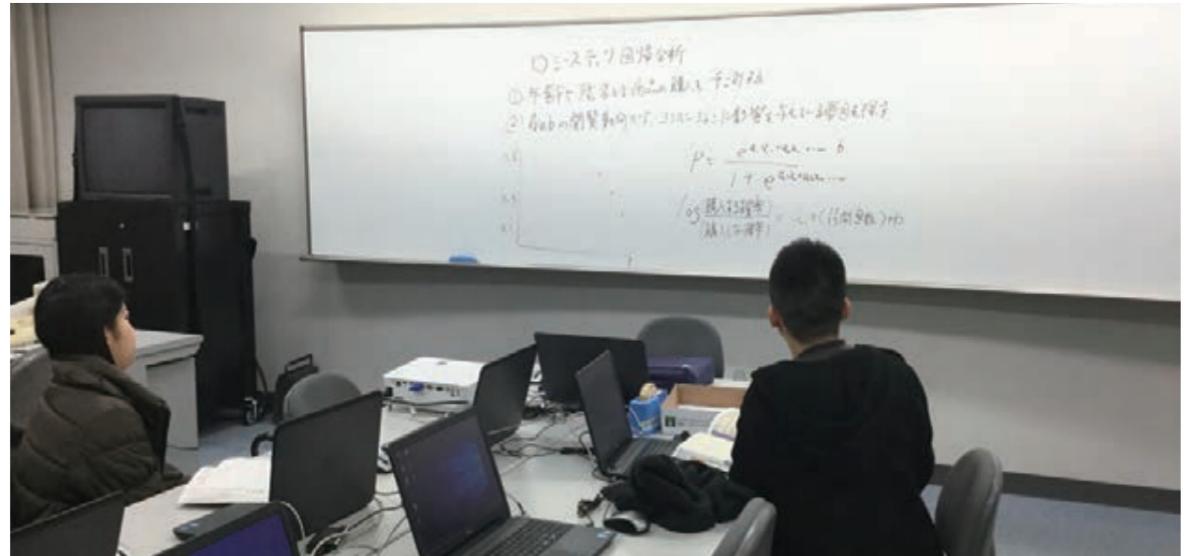
病床機能報告・DPCデータ分析による医療圏別病院医療の分析

科目名 地域経営演習Ⅳ-I

担当者名 岡本 悦司

演習の概要

わが国では全病院(精神科病院をのぞく)と有床診療所について2014年より詳細な診療実績を報告する「病床機能報告」が医療法により実施され、病院別データが公表されている。またDPC病院についてはDPC請求された全症例のデータが「DPC導入の影響評価」調査として公表されている。これら病院別データを市町村別、医療圏別に自在に集計できるようデータウェアハウス(Excel上でピボットテーブルとして操作できるよう加工されたもの)化し、学生はそれを操作して、自身が任意に選択した医療圏について様々な病院機能の分析を行う。病床機能報告は2025年を目標に進められている地域医療構想の基礎データであり、それを活用・分析することによって学生は自身の医療圏のみならず医療圏間の比較を行うことにより地域医療構想の進捗状況を把握することができる。



仕事(ビジネス)とは「何か」を考える。

科目名 専門研究Ⅰ・Ⅱ-D(3回生)

担当者名 加藤 好雄

演習の概要

近年、社会や企業が求める最も必要な能力として「複雑な課題解決能力」が挙げられるが、この能力に必要なものとして思考法や課題解決の手法がある。またその解決案は客観的な根拠(データ)に基づいていなければならない。そのために必要なのがデータ分析の知識・能力になる。前学期では、今までに習得したこれらの基礎的な知識・能力を考えることで、これから実際に行う就職活動や卒業後に意識し続けなければならない「仕事(ビジネス)」について学んだ。後学期は、「卒業論文」の事前準備として、論文のテーマ、研究の背景、研究の目的、調査手法、分析手法、研究成果の予測等からなる研究計画書の作成を行った。そして先行研究の調査を行い、論文を執筆することを体験することで次年度の「卒業研究」を意識する。



学生の気づき・コメント

甲斐 貴大 | 地域経営学科 3回生 大分県立大分雄城台高等学校(大分県)出身

専門研究では、研究テーマを自分で探し、実際に調査してまとめていくという作業を行った。最初は「若者に自炊を促すにはどうすればよいか」という研究テーマを進めていたが、調査結果における社会での有効性という観点から、進行半ばでとりやめる。改めて、「ECサイトでのクチコミという要因は、購買意思決定においてどの程度の優先順位であるか」という新たなテーマを立て調査を行った。この一連の流れから、研究における事前調査の重要性、そして先行研究を踏まえた新たなテーマを創造することの難しさを実際に体験した。研究を1つの文書にまとめるという作業は大変であったが、得るものも多かったように思える。先行研究を調査し、発展させ、成果物とするといったスキルは、社会では当たり前のように要求されているが、今回はそうした当たり前を、今の自分がどの程度の水準でこなせるか検証するといった意味で、有意義であったように思える。

岡元 公香 | 地域経営学科 3回生 京都共栄学園高等学校(京都府)出身

このゼミでは、自分でテーマを設定し、論文を執筆しました。毎週、課題を提出することで、自分で設定したテーマの内容の理解が深まりました。テーマを設定するのが、とても難しく悩みましたが、日ごろから様々な事柄に関心を持ち、問題意識をもって過ごすことが重要なのだと分かりました。どんなに小さなことでも関心を持ち、疑問を抱くことで今後の成長につながるのだと思いました。興味のある分野や関心のある物事を意識し、生活することが重要だと分かりました。自分で自らテーマを設定することは、視野が広がり、幅広い知識が得られると思いました。私は、働き方改革について調べましたが、ゼミで調べたことで、この先、働く中で役に立つ情報が分かりました。毎回、課題の振り返りを行っていただいたことで、視野が広がり論文の進め方が分かるようになりました。

「皆との議論で理解が深まる」

科目名 地域経営演習Ⅳ-K

担当者名 三品 勉

演習の概要

本年度の2年生ゼミでは「多変量解析の基礎」について学んだ。論文作成や実務において有効な手段となりうる因子分析、判別分析、クラスター分析などを中心に、その考え方や計算方法について検討した。

これらの手法の多くは、統計学に必要な基本的な事項(平均・分散など)と少しの数学運用技術(微分法など)が分かれば極めて明快に理解できる。ゼミに参加した5名はもともと多変量解析を理解したいといった明確な目的意識を持っていたので、全員の議論を通して理解を深めることができた。

手法の応用として教員が現在取り組んでいる「教科の特性と学習効果研究」についての事例を紹介した。





専門研究I:クルーズ船の船客の上陸時の行動調査 専門研究II:ロジスティクスの事例研究

科目名 専門研究I・II-B(3回生) 担当者名 篠原 正人

演習の概要

専門研究I:舞鶴港を調査対象として、寄港するクルーズ船の船客による上陸時の行動を調査し、地域振興策の一助とすることを企図した。
専門研究II:「ロジスティクス論」に実践的な知識を付加するために、新聞・雑誌を用いて、分野ごとに事例研究を行った。



学生の気づき・コメント

中西 駿介 | 地域経営学科 3回生 香川県大手前高等学校(香川県)出身

この科目では前期は舞鶴市に寄港したクルーズ船についての調査のため、実際に現地に入り舞鶴市の観光地を訪問した。そして寄港した中国人を対象にアンケート調査を実施し報告書を作成した。実際に現地に入りそこに訪れている観光客の生の声を聞くことで舞鶴が抱えている問題点、舞鶴また北近畿が観光の活性化のために、これからどこに力を入れていけるのか分析することができた。また後期では各自、自らが興味がある業界について業界分析を行い、ゼミ生と意見交換を行った。各自がそれぞれ調べた分野は幅広く、海運、陸運、空運、メーカー物流と多岐にわたる。ひとりひとりが違う分野の業界分析を行い、それを共有することで短い期間で多くの業界分析ができたと思う。後期で得た知識はこれからの就職活動という自らの将来を決める活動において役に立つ力になるだろう。

武内 匡 | 地域経営学科 3回生 大月市立大月短期大学(山梨県)出身

1年間、篠原正人教授のもと専門研究I、IIを学びロジスティクス論の基礎的な知識(主に海運の基礎)を学びました。ただ文献を用いて学ぶだけでなく、自身が興味を持ったロジスティクスに関するニュースや記事を選び学んだことを参考に、良い点と悪い点、疑問点を見つけたしそれをゼミ生で共有しあい、さらに、知識を深めることができました。また後半は、航空物流を自身の仮テーマと少しだけ研究しました。これにより、興味を持ったので卒業論文は航空物流も候補の一つと考えました。仮に卒業論文のテーマが航空物流でなくとも、文献から知識や情報を得て、それだけを知識とするだけでなく、他の文献と比べて、新聞記事やニュースをもとに詳しく企業別に調べる等をしたので、卒論を仕上げるために必要な思考力、想像力、探究心はある程度はつけられたと思っています。これからは篠原正人教授のもと納得のいく卒業論文を作りたいと考えています。

三浦 祐悟 | 地域経営学科 3回生 市立函館高等学校(北海道)出身

この一年間を通して篠原ゼミでは海運、クルーズ船や物流について学びを深めてきました。海運、クルーズ船につきましては前期にクルーズ船調査として外国の方、特に中国人の方からアンケート調査をし北近畿地域で観光するにあたってどのようなことが足りず、どのようなことに満足していたのかということ調査しました。また、実際にクルーズ船を目にする事で「百聞は一見に如かず」といいますが、スケールの大きさを実感することが出来ました。海運については種類、どのようなものを運ぶのか、かかわる組織には何があるのかなど多くのことを学びました。物流ではテーマごとに一人一人学びを深めました。私は物流について総合的に調べましたが、物流は非常に奥が深く様々な側面からのアプローチが必要な分野であるということに気づきました。私は今年度学んだ海運や物流だけではなく経営学にも興味を持っているので、海運や物流の理解をさらに深めたうえでそれがどのように企業の経営に関わっていくのかということについて今後考えていきたいと思います。

大崎 聡士 | 地域経営学科 3回生 近畿大学短期大学部(大阪府)出身

私は「専門研究I・II」を通じて、ビジネスにおける物流の重要性、また物流の複雑性について学ぶことができました。物流は必要なモノを、必要なだけ、必要な場所に、必要なタイミングで、適正なコストで計画的に補給するための重要な部門です。そのため、物流には様々な戦略があり、その戦略ごとに輸送手段があることを学びました。私はこの輸送手段の中でも特に鉄道貨物輸送について研究しました。鉄道貨物輸送は、長距離輸送が可能であること、大量輸送が可能であること、低環境負荷であること、以上の3つの特性があるということを理解しました。また鉄道貨物輸送の大部分はJR貨物が担っているということ。鉄道輸送の集約化が進んでおり、その数が減少していることも同時に分かりました。しかし、私は今の状況しか学んで来ていません。よって今後は、現在の鉄道貨物の集約化が進んでいる背景や何を主に運んでいるのかなどをより深く理解したうえで、今後の鉄道貨物について学んでいきたいと思います。

学生の気づき・コメント

小林 計介 | 地域経営学科 3回生 島田樟誠高等学校(静岡県)出身

私はこの一年間、篠原先生のゼミにおいて海運をはじめとする物流の分野について勉強してきました。前期では教科書を基に海運業界に関する知識を基礎レベルから学習し、自分なりに解釈し発表することから始めました。その後実際に舞鶴港に赴き、クルーズ船の調査を行うことでその実態についても肌で学ぶことができました。後期では物流業界全体の研究を海運、陸運、メーカー物流などに分けてそれぞれ担当して分析をしました。これらの活動を通して、業界研究をする力や就活するうえでの知識にプラスとなる情報を得ることができました。このゼミがきっかけで、物流業界も就活の選択肢として視野に入れることができたので、とても身になった1年であったと思います。

菊池 迪央 | 地域経営学科 3回生 岩手県立水沢高等学校(岩手県)出身

私は1年間のゼミの活動を通して、大きく成長することができました。はじめは、未熟な点が多々ありました。前期には、クルーズ船の調査を実施しました。準備不足や現地とのコミュニケーションが取れていなかったことから、成功とは言えない結果に至りました。また、受動的な姿勢だったことから吸収できたものが少なかったという反省点もありました。これを受けて、後期は積極的に研究に励みました。メーカー物流について新聞記事や雑誌、ネットなど様々な情報媒体を駆使して調べました。自分が求めているものが中々見つからず、研究には粘り強さが必要だということを実感しました。現段階ではまだまだ途中なので、来年の活動では実際に物流現場に足を運ぶなどして理解を深めたいと考えています。



TPP参加に伴う農業への影響試算

科目名 専門研究Ⅰ・Ⅱ-E(3回生)

担当者名 三好 ゆう

演習の概要

本演習の目的は、TPP参加により安価な輸入農作物が国内に入ってくると予想されることから、農水省の「試算の考え方」に基づき、京都府の市町村別(26自治体)の農業生産額への影響を明らかにすることであった。データの制約上、今年度は「米(コメ)」のみの試算に留まったが、自治体間に大きな差が出る結果となった。また、米の生産額だけでは地域性が浮き彫りにならないとの意見が出され、農業生産額(耕種農業・畜産・加工農作物)全体に占める割合で再度試算を行った。今後の研究の展開として、関連産業への影響も視野に入れる必要があること、その際に有用な分析手法があることまで見出すことができた点は、大きな成果といえる。



学生の気づき・コメント

相見 遥也 | 地域経営学科3回生 京都府立峰山高等学校(京都府)出身

試算に取り組み始めた当初は、TPPに対する考えや知識がほとんどない状態だった。しかし研究を進めていくうちに、都道府県全体のみでみた場合は大した額や割合ではなかったはずが、市町村単位で試算をすると大きく影響を受けてしまう地域が出てくるのが分かった。TPPへの参加により安価な輸入米が浸透して、地元米の生産が減少してしまうことになれば、地域のかたちや風景まで変わってしまうのではないかと、危機感を覚えた。京都府内では京丹後市が米の生産額の減少額が圧倒的に多かったため、京丹後市出身として地元米をどうしたら守れるのかを考えていきたい。また、京都北部信用金庫の方々に試算結果をみてもらう機会があり、様々な御意見をいただくことができた。今回は、データの制約上、米のみの発表となったが、実際はプロイラーと鶏卵についても計算を試みていた。データ諸元の違いで数値が異なっていたため、どうしてなのかを相当悩んだが、京都北部信用金庫の方々に有益な情報を沢山いただけたことで、解決することができた。試算のための計算式を作るのに半年以上もかかったり、必要な公表データを探したり、他にも考慮しないといけない点があることに気づいて試算のし直しが生じたりと、苦労が多かった。しかし実証分析という経験を通して、客観的に判断することの大切さを知った。また、TPPに対していろんな角度から考えることが出来るようになった。

山口 孔明 | 地域経営学科3回生 滋賀県立北津高等学校(滋賀県)出身

1年間のゼミでTPP参加による農業への影響を研究して、TPPへの理解を深めることができた。最初はニュースなどのマスコミ情報から、関税が無くなることで野菜などが安く買えるのであれば、それは良いことだと思っていた。しかし農林水産省が2013年に発表した農林水産物への影響試算で、国内の減少額が約3兆円と推計されていたことを知ったとき、考えが変わった。さらに近年の試算では、影響額が約1,300~2,100億円へとあまりにも大幅に修正されているので、自分自身で検証してみたいという気持ちが強くなった。先行研究を調べてみると、都道府県での試算にとどまっていた。これまでの大学での学びの中で、京都府北部をみると市町村レベルで得意な農産物がそれぞれあることを知っていたので、市町村単位での試算が必要なのではないかと気づき、研究を始めていった。一方で、TPP参加への経緯について2013年6月から今年までの新聞報道を集めて、見出し等の一覧表を作成したことで、政治的な流れを大きく掴みながら計算作業を進めていった。TPPへの参加については賛否両論があり、長期にわたって国内外で議論を続けてきたが、日本の得意な産業の優位性がばかり着目されている気がした。日本経済をマクロに捉えずに、一戸一戸の農家さんに与えるマイナス影響が代償になっていないか、と考えるようになった。また、試算結果では北部5市2町への影響の大きさに驚いた。TPPをテーマに取り組んできたことで、食料品を購入するときに生産地や販売元に意識がいくようになり、今後は国産を応援していきたいと思う。

研究テーマ

TPP参加に伴う農業への影響試算

— 京都府下の市町村のケース —

地域経営学部 地域経営学科3年 相見 遥也、辻 捺乃、日向 仁美、山口 孔明



Introduction | TPPによる農業への影響は大きい?

農水省 & 先行研究での試算

TPP参加により、安価な輸入農作物が国内に。

国家単位 & 都道府県単位で試算した研究結果によると

→「京都府」は全農作物の17.9%減少、47都道府県中34位!

「京都府」でみると影響は小さいように見える

市町村単位での試算の必要性

「京都府」の総人口の約56.5%が「京都市」に集中

→市町村間での産業構造が大きく異なる。

市町村単位で試算すると

- ①「京都府」内の農村部が浮き彫りになる
- ② 農作物への影響に対する当事者意識を持ってもらうことで、対策への協働が促される

目的: 京都府について市町村別(26自治体)の農業生産額への影響を明らかにする

手法: 農水省による2013年公表「各品目の試算の考え方」に基づき、米(コメ)の減少額を試算する

Method | どのように試算するか?

農水省試算の前置

関税率10%以上かつ国内生産額10億円以上の19品目

米(コメ)を取り上げる理由: データ制約上

- ① 5年分のデータが取得可能な数少ない品目だった
- ② 対象自治体のすべてで生産されている
- ③ 「生産」農家と「経営」農家がほぼ等しい(所在地が同じ)

米(コメ)の減少額の試算方法

農水省の「試算の考え方」によれば、国内生産量の約3割が輸入に置換 かつ 国内生産額が輸入価格に引きずられて下落

計算式

A: 輸入に置き換わる分の生産額

$$= (H25 \sim H29 \text{の生産量の加重平均} \times 30\%) \times \text{価格}$$

B: 残る国内分について価格が下落する分

$$= (H25 \sim H29 \text{の生産量の加重平均} \times 70\%) \times (\text{価格} \times 26\%)$$

TPP参加の影響額

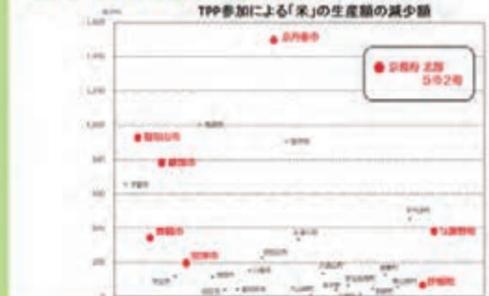
$$= \text{米(コメ)の生産減少額} \text{ A+B}$$

データ補完

- ・農林水産省「農林水産部への影響試算の計算方法について」
- ・農林水産省「作物統計調査 市町村別データ」
- ・農林水産省「米穀の取引に関する報告」
- ・農林業センサス 各年版

Result | 米(コメ)の減少額 試算結果

減少額では京丹後市が圧倒的!!!



市町村別に試算すると、自治体間に大きな差が...

Discussion | 考察

農業全体に占める米の地位が、そもそも違うのでは?

農業産出額(耕種+畜産+加工農作物)に占める米の生産減少額の割合



農業全体で考えると伊根町・与謝野町のダメージ(大)

本試算には表れない数値があるのでは?

- ・耕作放棄地が増えると、地力が下がり、農作物が出来にくくなる
- ・灌漑設備が不要になることで公共事業が減る
- ・農業生産が減ると関連産業(製粉業・農業機械の製造・物流産業など)の生産も減る → 地域経済規模が小さくなる → 税収が下がる

関連産業への影響は産業連関分析で試算可能か?

Future Work | 今後の課題・展開

畜産のうち、鶏卵は比較的「生産」農家と「経営」農家が等しく、データもあるので、試算が容易と考えられる

産業全体における農業全般の地位を考慮する必要がある

北都信金 地域創生事業部の方々との共同研究への展開

- ① ヒアリング先の紹介(上林の牧場・亀岡の鶏園)
- ② 5市2町「産業連関表」が完成した後、本試算結果を利用しての地域経済への影響試算



専門研究Ⅰ：ヘルスツーリズムを題材とした運動習慣の形成
 専門研究Ⅱ：卒業研究に向けたテーマの模索

科目名 専門研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（3回生）

担当者名 芦田 信之

演習の概要

【専門研究Ⅰの概要（4月から11月まで）】

健康増進を目的とした観光（ヘルスツーリズム）を題材として、運動生理学的アプローチにより「健康」を考え、文献調査や個別調査にてデータを収集し、具体的なヘルスツーリズムの商品開発を試みることにより、地域貢献をはかりつつ観光商品開発のしぐみを学習する。

【専門研究Ⅰの方法】

健康増進のための運動習慣を身につけるために、受講学生にアクティブウォッチ（心拍、歩数、GPSによる移動軌跡、消費カロリーなどが記録できるもの）を配布し、日々、装着して自分の運動記録をとるよう指示した。市内の三段池公園のオリエンテーリングや市北部の赤石山散策や与謝野町かや山の家麓の里地散策などのイベントを通して運動量と消費カロリーの計測をおこなった。

【専門研究Ⅰの結果】

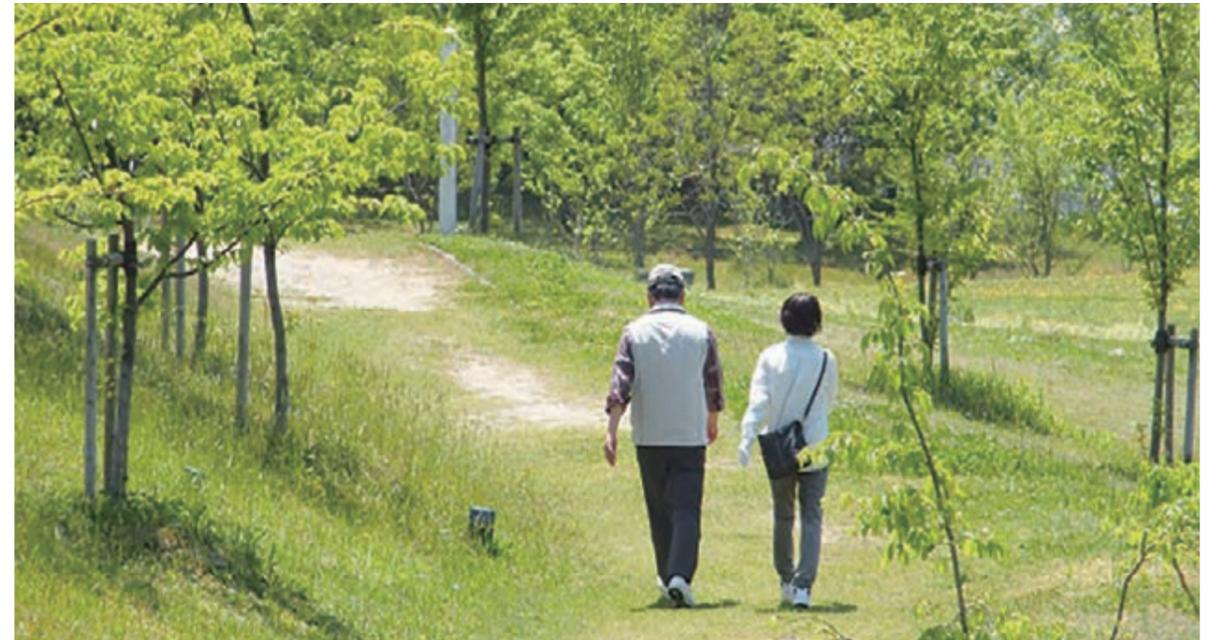
これらの成果としての結果データは、8月に開催されたeBIM（根拠に基づいた統合医療学会）での発表や11月に行われた市の産業フェアでの大学からの展示において活用した。

これらの活動の中で、「自分の健康は自分で管理する」ことをめざして、比較的個人でも計測できるバイタルサインの意義や測り方についての学習も行った。おもな測定機器は、アクティブウォッチ（心拍、歩数、消費カロリー、睡眠体動変化など）、SpO2（酸素飽和度）、リラックス計、皮下脂肪計、体重計・体脂肪計、血圧計、体温計である。さらに摂取カロリー、栄養調査として、糖度測定器、塩分測定器、血糖値測定器などを用いて自分の食生活を見直すことを体験した。



【専門研究Ⅰの反省点】

「健康増進」のための因子は「運動」「栄養」「休養」と言われている。運動と栄養に関しては、自分の生活範囲の中で測定することができたが、休養に関しては、発汗によるリラックス計や睡眠モニター、心拍バイオフィードバックモニター（副交感神経によるリラックス度を測定）を購入して測定しようとしたが、実施できなかった。（結果を出すまでに至らなかった。）また、当初、大江山山ろくで、運動推進のための「里地里山散策ルート」を選定し、里地里山を歩く「ヘルスツーリズムの里づくり」を目指し、観光商品を開発し地域貢献にも寄与することを目指していたが、定期的な開催のめどが立たずに実施できなかった。



演習の概要

【専門研究Ⅱの概要（12月以降）】

専門研究Ⅰの経験を踏まえて、「自分の健康は自分で管理する」ということを学び、4年次の卒業研究のテーマの模索を行った。これは、2月・3月も継続する予定である。

現在のところ、それぞれ3人の受講生が卒業研究としてテーマ設定していることは、

1. 食事と運動効果による血糖値変動
2. セルフメディケーションによる自己健康管理
3. ダイエットを目的とした諸方法の体験的検証

ということで、研究テーマの全体を俯瞰しながら、テーマに関する先行研究や資料集めを行い、同時に専門研究Ⅰでおこなっていた自分の健康指標を継続して計測をおこなっているところである。



与謝野町湯江地区でのヘルスツーリズムに参加



地域の特産物商品開発への挑戦

科目名 キャリア探究Ⅰ・Ⅱ-A(3回生) 担当者名 平野 真

演習の概要

学生の発案で、地域の活性化のために、自分たちで特産物の商品提案を行い、観光にも資することを考えた。当初、北近畿の特産の様々なお菓子を、アソートパックにし、商品化することを考えた。企画会議を重ね、アソートパックのデザインや構成を自分たちで提案し、プロタイプを試作した。最終的には、地域の伝統工芸を素材とした土産物の開発に発展し、東京の大手企業店舗の小物売り場を借りて、他の工芸商品を展開している京都や奈良の伝統工芸関連業者やクラフト品のベンチャー会社など4社と協力して「京都現代クラフト展」と題する展示頒布会を開催することになった。



自分たちでデザインしたアソートバック商品

学生の気づき・コメント

岡本 美穂 | 地域経営学科 3回生 兵庫県立豊岡総合高等学校(兵庫県)出身

前期のゼミで企画した北近畿の商品を詰めたアソートボックスは、価格や時間など様々な問題に直面し、実現できないということが分かった。中でも一番の問題は、中に詰めるモノにあるということが分かった。アソートボックスにつまづいた時、実際販売されている大分県のアソートボックスを分析してみると、中に詰められているモノは商品として世に出ているものではなく、干しシイタケや、かぼす味噌などの素材であるということが分かった。そのことから、地域の特産物を詰めたアソートボックスを作るには、素材を見つけたところから、その素材をうまく加工してモノにする時間が必要だということが分かった。(中略)平野先生2年間お世話になりました。個性豊かなメンバーと先生の経営学を学び、今まで考えたこともなかった企業の経営戦略を意識するようになりました。どの先生の授業よりも、今後に役立つ知識を教えてくださいありがとうございました。

丸山 遼 | 地域経営学科 3回生 京都府立北嵯峨高等学校(京都府)出身

私が、2018年にゼミの取り組みの中で力を入れていた事は、チームワークとチームの連携についてである。理由は、今後社会に出て行く上で一番大事だと考えたからだ。社会に出て、会社に入社すれば、上司ができて部下が必ず人間関係が発生する。その中でプロジェクトなどをしていく上で重要となる力だ。もしチームの仲が悪ければ、プロジェクトが成功する確率は減る。私はチームワークとは、「信頼」だと考えており、「信頼」は決して短期間で作り上げられるものではなく、小さな事を積み重ねて、その積み重ねが「信頼」になる。この「信頼」を維持し続けるにはどうすればよいのか。私が、一番難しいと思っているのは、「信頼」の継続である。(中略)私は、もっと自分に「貪欲」でありたいと考えており、そのためにもまず、「貪欲」とは何かを考えていくことにした。結果は、私の中で「貪欲」とは、つまり「探究心」だと考えます。「探究心」とは、物事を考え深める事を意味し、自分を考え、他人を考え、日本を考え、世界を考える事で自分が見えてくるのではないかと考え、私は、自分に貪欲であり続けるために以上の事柄をこれからも調べていく。

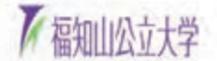
福吉 菜々 | 地域経営学科 3回生 大分県立大分雄城台高等学校(大分県)出身

私達が前期に企画したお土産は、北近畿で作られている既存のお土産を、自分達で選んで組み合わせたアソートパック商品である。プレゼンする企業が「京都丹後鉄道」だったため、くろまつ号の走る路線の地域のお土産をピックアップした。パッケージデザインは、丹後の伝説である浦嶋伝説に基づいて、玉手箱をイメージしたデザインにした。プレゼン結果から言うと、この企画は失敗に終わった。失敗の要因はすべて中途半端だったことにあると考える。商品の組み合わせ、くろまつ号への関連付け方やプレゼン内容が特に中途半端だった。そして、この中途半端を招いた理由は、話し合い不足と妥協だと考える。自分たちの妥協した点がそのまま企画の失敗要因になっているため、もっと4人で納得のいくまで話し合い、協力すべきだったと感じた。このお土産企画で、インパクトのある商品を企画することの難しさ、利益を出すためのコスト計算、それを現実化させることの難しさを学んだ。そして、なにかを妥協すると妥協した結果になることも学んだ。(後略)

谷口 弘幸 | 地域経営学科 3回生 京都府立海洋高等学校(京都府)出身

(前略)この1年間は、今までの大学生活の2年間と比べて、ぜんぜん違う1年間でしたし、濃い1年間だったと思います。漆と和紙を使った灯籠を売るためのマーケティングやアンケート調査を行い、お客さんと触れ合う機会もありました。自分たちの思っていることとお客さんの思っていることの差があまりにもあり過ぎて、自分たちの思うように商品売ることの難しさも分かりました。こういった機会を大切に、将来に役立てていきたいと思っています。この1年間は来年の就職活動に向けて色々準備することのできた1年だったと思います。ゼミに入ってから今頃、なにもせずにただ過ごしていたと思います。(中略)大学生活はあと一年残っているので就職活動にしても、日常生活にしてもしっかりと自分の悔いのないようにしたいです。(中略)私も含めた平野ゼミのみんなが自分達のしたい職業に就けたら最高です。その為、これからも困った時などは相談し、助け合っていく予定です。

地域の特産物商品開発への挑戦



福知山公立大学地域経営学部3回生キャリア探究IIA(担当教員:平野真)

(1) 北近畿アソートボックスの開発

きっかけ:自分達が北近畿を今以上にPRしたい。

観光客が家に帰ってから北近畿での旅を思い出せるような商品を開発したい。

自分たちの目で、20種類の製品を比較検討し、詰め合わせの製品を選ぶ。

北近畿地域の商品・企業の呼び水的存在になるアソートボックスの開発

購入し検討した既製の商品群の例(一部)



(2) 商品開発との格闘

課題:既製の商品を集めると、自分たちの利益が出にくい

競合分析:大分の特産物パックでは、既製品ではなく、素材(椎茸、カボス、みそ、ワカメなど)の組み合わせで、アソートによる利益を創出していた

気づき:原価率の設計、付加価値の創出

自分たちでデザインしたアソートバック商品



(3) 利益の出る商品づくりへ

地元の伝統工芸を素材として用いる商品のアイデアは、自分たちで考える

嵐山の駅にあった友禅のディスプレイをヒントにした

価格の3割にコストを設計
アンケート調査により消費者の嗜好も調査
職人さんたちと協力して試作品を製作

考案した伝統工芸商品(土産物)



(4) 到達点:福知山の伝統工芸(大江の和紙、夜久野の漆)を用いた特産品灯籠を提案

プロタイプを製作し、東京でテスト販売の予定。(企業4社と連携)

- 学んだこと
- 商品づくりの難しさと楽しさ
- 利益を出すことの難しさ
- 企業との連携の難しさ

より力をつけて、実際に社会で活躍したい!



京都工芸現代クラフト展

2019年3月13日(水)~19日(火)※日本橋丸善3階



株式会社平野商店
株式会社社商店
ぬるべの郷 漆工房(奈良県)
株式会社京都製菓
京都福知山伝統工芸を守る会



問題発見から解決を試みる小さなプロジェクトの実践 ～新町商店街界隈をフィールドにしたワークショップ手法を用いた活動～

科目名 キャリア探究 I・II-B (3 回生) 担当者名 谷口 知弘

演習の概要

2年生の演習で学んだワークショップの理論と技法を活かして、地域社会の問題解決を題材に小さなプロジェクトを実践した。前学期はメンバーの問題意識の共有、テーマの設定とチームづくり、事例研究を中心に行った。後学期には、2チームそれぞれで、各テーマに焦点を当てた問題発見から解決に至る集める (Research) → 企てる (Plan) → 創る (Prototyping) → 「振り返る (Check/Action)」のプロセスをプロジェクトとして実践し、プロジェクトマネジメントを体験的に学んだ。

次の2つのテーマ、2つのチームで実践した。

- ふるさとの味プロジェクト「学生のふるさとの『味』交流会」
- 古着プロジェクト～Team SAMURAI「Tシャツアートと環境問題 in 福知山ワンダーマーケット」

学生の気づき・コメント

伊藤 慧祐 | 地域経営学科 3 回生 大月市立大月短期大学 (山梨県) 出身

今回の交流会成功のカギは、上紺屋自治会ラジオ体操部への参加だったと考えている。もし、ラジオ体操に参加するなどの事前交流の手順を踏んでいなかったら当日の参加者は半分にも満たなかっただろう。住民に私たちの顔を覚えてもらう役割を担ってくれたのがラジオ体操だった。現に行演習の参加者も、本番の準備・片付けのお手伝いをしてくださったのもラジオ体操でつながりを持った方々だった。アンケートの結果から学生の郷土料理をコンセプトとしたこの企画は概ね好評であることが確認できた。また、他地域の学生の郷土料理も食べてみたいという意見も多く寄せられた。学生と住民をつなぐふれあいの場として期待できると考える。この企画で学んだ、繋がりを構築することから始めるというアプローチの方法は今後の学生生活にも活かしていきたい。今後の人生においてグループで大勢を巻き込むプロジェクトを行うこともあると思う。人とのつながりを蔑ろにせず、人とのつながりは自分の財産、力になるということ意識して生きていきたいと思った。

武内 匡 | 地域経営学科 3 回生 大月市立大月短期大学 (山梨県) 出身

私は今回の活動をしてまず素直にやり遂げられ良かったと思う。今回はみんなでやりたいことがまとまらず、ギリギリまで当日開催が困難な状況まであった。しかし言い出しっぱなしである私が先陣を切り動かないといけないと思い、活動の初めとして広告作りを取り組んだ。ポスターは一度だけ作ったことがあったが、それ以来作っていなかったこともあり、アイデアが思い浮かばず試行錯誤を繰り返していた。そこで、谷口先生から助言をいただき無事完成し、そこからプロジェクトTEAMが始動し、自分が先陣切ったことが報われ嬉しかった。私は観光会社の企画・製作側の仕事に就きたいので今回の経験した企画や、ポスターのデザインなどを活かしたいと思う。

清水 康平 | 地域経営学科 3 回生 福井県立若狭高等学校 (福井県) 出身

今回のプロジェクトである地域の皆さんとの郷土料理を通しての交流は、準備からご協力いただいた地域住民の方がいなかったら成功していただけないかと思う。ただ、チラシを配っただけでは約30人もの参加者はあり得なかったのではないかと。ご協力をお願いした上紺屋自治会のラジオ体操部の方々と呼び掛けてくださったのが一番の成功につながった要素だった。地域と交流するプロジェクトに取り組む際は、事前に地域に出て、顔を覚えてもらうことからスタートすることが重要だと学んだ。これからプロジェクトに取り組む際にも忘れずにしたい。また、ラジオ体操部では、急に参加した僕たちも暖かく迎えて頂き、良い空気の中で行えたことに感謝する。今後の学生生活では、どのような地域の人の話もしっかり聞いて地域のことを深く知ろうとするスタンスを持ちたいと思った。また、今回のプロジェクトの経験を就活等でも活かしていきたい。

松村 飛馬 | 地域経営学科 3 回生 精華高等学校 (大阪府) 出身

本番直前までなかなかやる気の出ないメンバーたちで、作業どころか企画の話し合いすらも全然進まない状態だった。しかし、そんなメンバーに谷口先生は根気強く言葉をかけてくれた。そうして少しずつ作業が進み、当日を迎えることができた。福知山ワンダーマーケットは想像以上の賑わいで、飲食や雑貨の店が並ぶ中、「魅せる」「聞かせる」だけのプロジェクトに少し不安も出てきた。初めはなかなかお客さんが入ってこず、思っていた通りにはならなかった。しかし時間がたつにつれて1人、2人と足を運んでくれるようになり、最終的には何十人も人が参加してくれた。売り上げなどの目に見える結果はないが、少しでも環境問題やリサイクル、エシカルファッションについて知っていただけたら嬉しく思う。このチームの課題としては、やはりスタートが遅いこと。しかし、動き始めたのが直前だったため問題は多くあるものの、プロジェクト自体は成功と言えるのではないだろうか。私はこのメンバーで出来たことが凄くうれしい。そして、ゼロからなにかを生み出す難しさ、それを生み出し成功させた後の達成感は今まで一番感じられた。



1. 活動の概要
福知山大学の学生がふるさとの味プロジェクト「味」交流会を開催し、学生がふるさとの味を伝えるための企画・実行を行った。本報は、この活動の概要や学生が感じたこと、また、活動の意義や今後の展望について、活動の中心人物である「学生」のインタビューを通じて紹介する。

2. 活動の背景と目的
この活動は、福知山大学の学生がふるさとの味を伝えるための企画・実行を行った。本報は、この活動の概要や学生が感じたこと、また、活動の意義や今後の展望について、活動の中心人物である「学生」のインタビューを通じて紹介する。

3. 活動の様子
1. 準備期間: 活動の準備期間には、メンバーが各自でふるさとの味を伝えるための企画・実行を行った。2. 開催: 11月27日(日)に福知山ワンダーマーケットで開催された。3. 参加: 当日は、多くの学生が参加し、ふるさとの味を伝えるための企画・実行を行った。

4. 結果及び考察
本報は、この活動の概要や学生が感じたこと、また、活動の意義や今後の展望について、活動の中心人物である「学生」のインタビューを通じて紹介する。

5. まとめ
今回の活動を通じて、学生がふるさとの味を伝えるための企画・実行を行った。本報は、この活動の概要や学生が感じたこと、また、活動の意義や今後の展望について、活動の中心人物である「学生」のインタビューを通じて紹介する。

地域の声

ふるさとの味プロジェクト「学生のふるさとの『味』交流会」の企画・実践にご協力いただいた森下修次さん(上紺屋自治会ラジオ体操部)の講習

ふるさとの味プロジェクト「学生のふるさとの『味』交流会」について

初めに相談を受けた時、興味は感じましたが、自分なら参加するだろうか・・・と思い、どうしたら参加者が増えるだろうと考えて、「来てもらう前に自分達から地域に打って出る」ことをアドバイスしました。彼らは、意欲的に「上紺屋ラジオ体操」に参加し、地域の方々に顔を売り、親しみを持ってもらえるよう活動していました。「交流」には、マニュアルもなければ、決まった方法もありません。だからこそ地域の様子に合わせて、自分達から打ち込むことが大切ですね。その中から信頼関係が構築されていくのでしょう。彼らには、この取り組みの経験を生かして、さらに古里という特徴をうまく利用したイベントを考える力を培ってほしいと思いました。「郷土料理」という点では、全国各地の学生さん達で、日本中のいろいろな郷土料理が味わえるよう取り組みを広げていってください。「古里」という点では、料理に限らず、「ふるさと自慢」ができる「土産」「特産物」を具体物として使い、古里紹介会をしていただくと、興味を持って参加していけるのではないかと思います。旅行している気分になって楽しいと思います。発表の仕方は、原稿を棒読みにしなくて、聞いている人の表情を意識して、アドリブを入れたり、興味のありそうな所をふくらませたりして、声の大きさ、勢い、抑揚を生かして発表すると、さらに聞き手に魅力を感じさせることができると思います。(これは、経験をつめば自然に自分のものになります) ポスターについては、写真や図を多く取り入れ、細々とした説明文よりも「キーワード」を大きく目立つようにしてまとめることを奨めます。(極端に言えば、手書きの方が目を引く)

1. 活動目的
この活動を通して、学生がエシカルファッションへの関心を高める試みを行った。本報は、この活動の概要や学生が感じたこと、また、活動の意義や今後の展望について、活動の中心人物である「学生」のインタビューを通じて紹介する。

2. 活動概要
この活動は、福知山大学の学生がエシカルファッションへの関心を高める試みを行った。本報は、この活動の概要や学生が感じたこと、また、活動の意義や今後の展望について、活動の中心人物である「学生」のインタビューを通じて紹介する。

3. 活動内容
1. 企画: Tシャツアートの企画・実行を行った。2. 開催: 11月27日(日)に福知山ワンダーマーケットで開催された。3. 参加: 当日は、多くの学生が参加し、エシカルファッションへの関心を高める試みを行った。

4. 評価と考察 (アンケート結果より)
11月27日(日)開催されたワークショップ「Tシャツアートと環境問題 in 福知山ワンダーマーケット」は、多くの学生が参加し、エシカルファッションへの関心を高める試みを行った。本報は、この活動の概要や学生が感じたこと、また、活動の意義や今後の展望について、活動の中心人物である「学生」のインタビューを通じて紹介する。

古着プロジェクト～Team SAMURAI「Tシャツアートと環境問題 in 福知山ワンダーマーケット」について



余っているTシャツは、環境問題に切り込む身近なよい材料だと感じました。取り組みの宣伝ポスターは所々で見ましたが、宣伝効果が思ったほどなかったのではないのでしょうか。いくら良い取り組みをしても、地域の人は、知らない所や初めての所へはなかなか行きにくいものです。人は、人と人との繋がりの中で動きます。その取り組みの意義を一人一人に語り、その良さを多くの人に理解してもらってこそ、多くの人に来てもらえるのではないのでしょうか。せつかくの良い取り組み(考え方)ですが、ワンダーマーケットの日でなかったとしても、みんなが興味を持って参加したり協力したりできるよう、取り組み方を一緒にいろいろ試したり考えたりしていきましょう。



1人1プロジェクトリーダー制による地域創生とキャリア開発

科目名 キャリア探究 I・II-C (3 回生)

担当者名 杉岡 秀紀

演習の概要

本演習では、基礎的な文献購読で専門の基礎を固めつつ、府内の自治体・企業・NPO等と連携しながら、プロジェクトを「1人1リーダー制」で取り組んだ。

具体的には、以下のような課題解決のためのプロジェクト(とりわけリーダー経験)を体感することを通じて、地域創生に貢献しつつ、一人ひとりのキャリア開発へとつなげていった。

- ①文献輪読、②5大学インゼミ@山形、③商店街創生(東舞鶴)、④防災まちづくり(防災サークルと連動)、⑤高大社連携プロジェクト、⑥京都から発信する政策研究交流大会プロジェクト(政策コンペ)、⑦全国大学まちづくり政策フォーラム(同)、⑧観光まちづくりコンテスト(同)。



学生の気づき・コメント

狩山 絢一 | 地域経営学科 3 回生 岡山県立笠岡高等学校(岡山県) 出身

このゼミでは大きく成長することができました。このゼミでは1プロジェクト1リーダー制を設けており、私がリーダーとして務めたプロジェクトは、「森の京都観光プランコンテスト」と呼ばれる森の京都DMOが主催する大会。私はゼミに入る前は、プレゼン力が乏しく、人前に立つと喋る事が出来ない人間でした。しかし、プレゼン力が高い仲間たちを見て、自分も変わらなうといけなくて強く感じていました。そのため、自身がリーダーを務めたプロジェクトは自分でプレゼンしたいと思い、志願して当日プレゼンを行いました。何度も練習した甲斐があり、以前の私では想像もつかないほどはっきりと喋る事ができ、優秀賞を獲得する事が出来ました。この経験が自分のターニングポイントとなり、今では人前にも喋る事が普通にできるようまで成長する事ができています。学びも勿論あったが、成長するきっかけ、機会をくれたこのゼミには深く感謝しています。

佐々木 祐奈 | 地域経営学科 3 回生 京都暁星高等学校(京都府) 出身

ゼミの取り組みの中で一番印象に残っているのが、2つのグループに別れ福知山市内の企業と連携して企画を考えるPBLの取り組みです。私たちのグループは、サンブラザ万助さんという企業と連携し取り組みを行いました。万助さんからの「外(観光客)だけでなく内(福知山市民)も盛り上げる仕組みが欲しい」という課題のもと、どうすれば万助さんに内からも外からも人を呼びこむことができるのか、どんなイベントが有効なのかなどをグループで話し合いました。中間報告会では、「提案された企画は必ずやる」という社長からのメッセージも頂きました。私たちもそれに応えるために会議を何度も重ね、当日は納得のいく企画を提案することができました。普段関わることのできない企業との連携で企業側の視点で企画を考えることもでき、また外から見る人の視点でも考えることができました。この取り組みは自分の力にもなり、どんなことでも連携して物事を考えることの重要性を改めて感じました。

小林 拓真 | 地域経営学科 3 回生 明誠学院高等学校(岡山県) 出身

昨年度小樽商科大学と東北公益文科大学と杉岡ゼミの3大学合同で行ったゼミ合宿に京都産業大学と島根大学が加わり、5大学合同でゼミ合宿を行いました。今年度は東北公益文科大学が幹事となり、山形県の庄内町に3日間滞在しました。他大学の学生とチームを作り、聞き込み調査やフィールドワークなどを通じ、対象地域の活性化案を寝る間も惜しんで考え続けました。最終日には地域の方や先生の前でプレゼンし、1位のチームには山形の名産品がプレゼントされました。違う地域で学ぶ同世代の学生と真剣に考え続けることで普段の講義やゼミとは違った学びを深めることができました。合間にはみんなでBBQをするなど全力で楽しみ、全力で学ぶことができた3日間でした。来年度は福知山公立大学と京都産業大学が幹事校となるのでこの合宿を後輩たちに引き継ぎ、陰ながら支えることでよりよいものにしていきたいと思います。

東 祐多朗 | 地域経営学科 3 回生 石川県立金沢錦丘高等学校(石川県) 出身

このゼミでは、2018年の5月から半年間かけて地域企業PBLを行いました。これは、福知山市の企業とともに行うもので、私はリーダーとして企画を行いました。しかし、リーダーとして仕事ができずうまくチームを回すことができませんでした。結果として、チームメンバーの力を借りることでうまくいきました。さらに、協力した企業の方も僕たちが提案したことを取り入れて頑張ってくれるとのことでした。色々と辛いことはありましたが、最終的にはとても喜べました。この企画を通してわかったことは、私にはスケジュール管理能力が備わっていないということ、協力した企業とは親身に接すれば、相手も親身に接してくれるということなどです。このゼミは色々なことを学べるので後輩や高校生にもおすすめですし、今回のPBLで得た知識やスキルは将来私が社会に出た時にも使ってみようと思います。

キャリア探究 I・II (杉岡ゼミ)

「1人1プロジェクトリーダー制による地域創生とキャリア開発」

狩山絢一、蒲生健一郎、古泉伊織、小林拓真、佐々木祐奈、田中友季也、東祐多朗(3年生)

キャリア演習II (杉岡ゼミ)

- 「地方自治・商店街創生・防災まちづくり」をテーマに活動。
- 基礎的な文献購読(自治政策への留意)と、自治体・企業・NPO等と連携して行うプロジェクト学習が特徴。
- 前年度と同様にプロジェクトリーダー経験を通して「地域づくりに必要なスキル」や「プロジェクトマネジメント力」の獲得を目指す。
- フィールドは京都を中心に、遠く山形県にも足を運んだ。
- その他、政策コンペにも積極的に参加するほか、他大学のゼミにも参加。

プロジェクト学習

- このゼミでは、1人1プロジェクトリーダーを担い、
 - ①舞鶴商店街創生プロジェクト(蒲生)
 - ②5大学連携プロジェクト「インゼミ」(小林)
 - ③全国大学まちづくり政策フォーラム(佐々木)
 - ④森の京都観光政策ビジネスコンペ(東)
 - ⑤京都から発信する政策研究交流大会(田中)
 - ⑥経済界との連携-PBL(狩山)
 - ⑦高大社連携(古泉)
- 上記の他に、防災サークル「福知山公立大学FAS1」を設立、運営している。

舞鶴商店街創生プロジェクト

- 舞鶴ホラーハウスへの参画
- 前年と同様夏休みの子ども連や同様に開催されていた同人誌即売会等をターゲットとしたお化け屋敷「舞鶴ホラーハウス」に企画段階から参加。
- 今回はテレビの取材を受けるなど、例年以上に盛況であった。
- 福知山ゼミのイベントへの参加
- 舞鶴商店街の町おこしの一環であるイベント「お化け屋敷「よーい!」」に参加。
- 賞を中心とした賞品の出し物は今年も好評。

インゼミ in 山形

- 5つの大学がそれぞれの垣根を超えたチームを結成し、山形県立谷沢地区の課題を解決するための調査を実施。教交を深めつつそれぞれの大学の特色を活かして研究を進め、立谷沢地区に提案するという形で発表した。

経済界との連携

高大社連携事業

- 南和える代表 矢島智恵子さん、総務エムアグリア代表 塚本美奈さんを中心として、高校生、大学生、社会人との意見交換を行った。
- 「働く・学ぶ」をテーマにしたワークショップを行った。

PBL

- 舞鶴PBL。新卒ラザワ助と半年間連携し、企業の課題についての解決案を提案した。
- HOPEPBLではユーザー・プラットフォームの交流を促した「HOPEPBL」を開催。
- サンブラザ万助ではピアラーニングと連携を促した観光まちづくりツアーを開催した。

政策コンペ

- 森の京都観光プランコンテスト
- 福知山城と亀山城の2つを掛け合わせた「お城・脱出ゲームツアー」を提案。斬新さが評価され、優秀賞を受賞。
- 第14回 京都から発信する政策研究交流大会
- パネル発表と口頭発表を行うグループに分かれての発表。「防災と変わらない防災のスズメ」「副業」ではなく、みんなが幸福になるための「福」案をそれぞれ提案。ベスト賞を受賞。
- この他、3月には京田辺にて開催される全国大学まちづくりフォーラムにも参加。

福知山公立大学
The University of Fukuchiyama



「天職観光」(天職のヒントを探す旅) ～オーバーツーリズム時代の新しい旅の提案～

科目名 キャリア探究 I・II-D (3回生)

担当者名 塩見 直紀

演習の概要

人はなぜ旅をするのか。人は自分を変えるために、未来のヒント、天職のヒントを探す旅をするのではないか、それを応援するまちが今後選ばれるのではないか。「天職観光」という仮説のもと、府北部事例や学生の出身地など全国事例を収集。また、天職をもつ人はいま、どこに旅しているか。福知山近辺の天職をもつ8名にインタビュー。新しい旅のあり方を探りました。オーバーツーリズムの時代の対応を模索する世界。京都もいまその難問を抱えています。成果物として5名の学生の出身県のまちづくりや起業等に役立つ先進事例をAtoZで26事例をパンフレットにまとめ、新しい旅の方向性、観光のあり方を京都府等にも提案していきます。



学生の気づき・コメント

井上 麻実 | 地域経営学科 3回生 松江市立女子高等学校(島根県) 出身

「天職観光」。私は、この言葉を知るまで、旅行はただただ楽しむために行くものであると思っていました。しかし、天職観光という言葉聞き、たくさんの方にインタビューをしていく中で、旅行とは楽しいのは勿論、なにか「目的」を持つて行くことがとても重要であることが分かりました。「人に会いに行く旅」をする人もいれば、「美味しいものを食べるための旅」の人もいます。つまり、人それぞれ目的は異なります。しかし、何か目的を持ち、異なった場所で何かインスピレーションを受けて人は成長出来るということに関しては共通して言えるのではないのでしょうか。世界では、様々な観光の在り方が存在します。「天職観光」は、自分のやりたいこと、これからの人生に関わる大切なことを見つけることができる観光の在り方であると思います。私は、この先、自分のしたいこと、どんな自分になりたいかをたくさん旅行を通して見つけて行きたいと思っています。

小林 稜大 | 地域経営学科 3回生 鳥取城北高等学校(鳥取県) 出身

2018年度は「天職観光」にスポットを当てて取り組んできました。結論から言うと、今年度が終わろうとしている今、天職観光の在り方についての答えは出すことができていません。とは言うものの、このテーマについて答えを出す必要があるのだからと考えた時に、個人的にはその必要はないのではないかと考えています。その理由の一つ、「天職を求めて、旅・観光をする、又は望む人の数だけ答えが存在する」と考えているからです。今学期では、そんな天職を求めている人に自分自身の地元や今住んでいる北近畿、京都府北部の魅力を伝えたら、どんな場所をどんな人向けにどのように伝えるかに取り組みました。北近畿や京都府北部に関しては、在学中に住んでいないということもあり、正直なところあまりいいものを作ることはできなかったと思っています。しかし、地元就職を考えている私なら18年間育ち、そしてまた卒業後に住む街のことであれば、もっとレベルの高いものが作ることができると思うので、今学期得たものを活かしていければと思っています。

梶房 明希 | 地域経営学科 3回生 岡山学芸館高等学校(岡山県) 出身

「天職観光」とは、自分の天職や生き方のヒントを探す旅。天職を見つける、自分の生き方を見つけることは意外と難しいもの。けれども、旅には様々な出会いがあります。人、文化、言葉、生き物など。小さな出会いに気づき、重ねていくことが大きなヒントになり、知らなかった自分に出会うきっかけになります。出会いはどこにでもあるもの。住んでいる地域でも、隣の町でも、隣の県でも、日本でも、外国でも。観光の場合、目的は決まっていることが多いですが、天職観光では決まっていな何かを探しに行くことが目的であることが大きな違いだと思います。何を見つけるのか、どのくらいで出会えるのか。わからないところにワクワクがあるのではないのでしょうか。価値観や生き方が人それぞれであるように旅の行き先も目的も人それぞれ。どのような旅でも、その旅の中に人生を変える出会いがあるかもしれないと思えば、どんな旅でも面白いものになると思います。

稲留 優樹 | 地域経営学科 3回生 奈良県立生駒高等学校(奈良県) 出身

就職活動を控えるなか、塩見ゼミに入っていたことは非常に良いアドバンテージになると実感しています。珍しい学部であることから地域経営について問われることも多く、その際には必ずゼミで学んだことをもとに説明しています。珍しいというのは既に有利ですが、それを説明できなければ意味がありません。塩見ゼミでは移住者にインタビューをおこない、それをAtoZというこれまで珍しい形のミニブックに纏めた一連の流れはその説明に適していました。そこから話が進み、自然と緊張がほぐれていくのを実感した時、塩見ゼミに入っていて良かったと感じました。普段なら会えないであろう著名な方や初見では入りづらい雰囲気な店のオーナーなど、紹介してもらわなければ一生知らなかったであろう個性豊かな方々。そういった方とお話しする機会ができたことは、就職活動に限らず今後にも活用できる実践的なゼミでした。

地域経営研究 I・II 稲留優樹・井上麻実・梶房明希・小林稜大・橋田啓+塩見直紀

テーマ：「天職観光」(天職のヒントを探す旅) ～オーバーツーリズム時代の新しい旅の提案～

概要：人はなぜ旅をするのか。人は自分を変えるために、未来のヒント、天職のヒントを探す旅をするのではないか。それを応援するまちが今後選ばれるのではないか。「天職観光」という仮説のもと、府北部事例や学生の出身地など全国事例を収集。天職をもつ人はいま、どこに旅しているか。福知山近辺の天職をもつ8名にインタビュー(写真1~3)、新しい旅のあり方を探りました。

成果物：オーバーツーリズムの時代の対応を模索する世界。京都市内もいまその難問を抱えています。5名の学生が新しい旅の方向性、未来の観光のあり方を提案。まちづくりや起業、今後の人生等に役立つ先進事例をAtoZ編集手法で26事例をパンフレットにまとめました。観光のみならず、まちづくりや創業、生涯学習等、「人生100年時代」のヒントになれば幸いです。



←写真1 ホテルロイヤルヒル福知山のホテルマン・林あゆみさんは今までどこを旅してきたのか、インタビュー



写真2

「小さなアースデー綾部」主宰の大力夫妻は今、どこを旅しているのか→



←写真3 写真家・藤崎優子さんは今後、どこを旅するのか



●成果物(5作)

- 「天職観光AtoZ 奈良編」(作・稲留優樹)
- 「天職観光AtoZ 島根編」(作・井上麻実)
- 「天職観光AtoZ 岡山編」(作・梶房明希)
- 「天職観光AtoZ 鳥取編」(作・小林稜大)
- 「天職観光AtoZ 古墳編」(作・橋田 啓)

※新たに生まれる視点 中国3県→5県、古墳編→山城編など 奈良編→奈良県全市町村編・・・



教育活動における中大連携の現状と課題

科目名 キャリア探究Ⅰ・Ⅱ-E(3回生)

担当者名 江上 直樹

演習の概要

大学においても初等中等教育機関においても地域連携が重視される昨今、大学と初等中等教育機関がいかに連携をするかという点もまた、論点の一つとなっている。しかしながら、大学と初等中等教育機関との連携に関する研究については、事例報告としてのものが多くを占めており、大学と初等中等教育機関とが連携して教育を行うことの成果や課題が体系的に整理されているとはいえない。そこで本報告では、大学と初等中等教育機関とが連携して教育を行うことの成果と課題を明らかにする第一歩として、大学と中学校との連携事例について調査を行った。調査については文献調査を基本とし、事例のメタ分析という手法を用いて各文献の内容について整理・分析を行った。



学生の気づき・コメント

田村 怜也 | 地域経営学科 3回生 兵庫県立八鹿高等学校(兵庫県)出身

今年度の取り組みとして、前期は教育についての基本(主に法令や教育課程)を学び、後期には大学と初等中等教育機関との連携について書かれた論文を集めて、事例のメタ分析により共通課題・成果を取りまとめた。また、福岡県庁に赴き、学習支援ボランティア人材バンク「エール」についてのインタビュー調査を行うこともできました。福知山市で活かせるような点を教えていただいたり、全国の自治体との比較など、詳細にお話しできました。私が学んだこととしては、今後のデータ・論文の分析に活かせる事例のメタ分析が主要な事だと思えます。今後の課題としてはゼミで仕上げたデータをより深く裏付けし、次の研究段階へ進むことだと思います。来年度では、今年度あまり実施できなかった隣接地域の中学校との連携を進めていきたいと考えています。

小林 計介 | 地域経営学科 3回生 島田樟誠高等学校(静岡県)出身

私はこの1年江上先生のゼミで教育政策について学んできました。教育制度の基本的な仕組みや名称などから学習し、新しくなった学習指導要綱による地域での教育についての勉強、事例のメタ分析を用いた大学と地域の教育連携事業など基礎的な部分から地域に焦点を当てた研究までじっくりと学ぶことができました。基本的には週一回のゼミの時間内においてパソコンを使用し調べた文献収集をしていますが、座学だけでなく実際に中学校を訪れたりドローンをつかってみたりと外での活動も行いました。特に後期では県が行う教育連携事業を担当する県庁職員にインタビューを敢行するため福岡県に行きました。そこで聞いた事業のやりがい、難しさ、課題などのお話は、パソコンで調べていた私たちにとって肌で感じることができた貴重な時間となりました。このゼミを通して日本の教育分野の現状について、また教育分野が抱えている課題について把握できたこと、論文の製作用法や調査方法など社会に出てからも役立つ大切なことをたくさん身に付けることができたと思います。

江崎 公貴 | 地域経営学科 3回生 愛知県立杏和高等学校(愛知県)出身

今年度のゼミでは、現地調査に加えて、過去の事例について資料収集、考察を数多く行いました。主に「Cinii」を使用し、文献収集を行い文献の概要をGoogleスプレッドシートに取りまとめる作業でした。実際に多くの文献収集を行い、考察を行ったことにより、知識が増え、今後のゼミ調査の方針が見えてきました。他にも、初の県外調査で福岡県に行き、京都府外の現状についても実際に足を運び学ぶことができ、またこれまでゼミ以外では話す機会がなかった新しいゼミのメンバーとも仲良くなり、メンバー同士の絆も深まりました。今年度のゼミから、人数が2人から4人に増えたことで、これまでより賑やかに、また深い話し合いを行うことが出来ました。来年は今年の活動で培った知識、ゼミメンバーの絆を發揮し学生生活最後のゼミを楽しんでいきたいです。そして、卒業論文や就活に直結してくる調査や活動を行うと思うので気を引き締めて挑んでいきたいです。

菊池 迪央 | 地域経営学科 3回生 岩手県立水沢高等学校(岩手県)出身

私は、昨年度に引き続き、江上先生のもとで教育政策を学んできました。前期には、兵庫県立石高高校に足を運び、高校におけるアクティブラーニングの現状を調査しました。現場の声を聞くことで、アクティブラーニングを実施していくには、地域や高等教育機関等との連携が重要であるということが明らかになりました。これを踏まえて、後期には、中学校と大学の連携について学びを深めるために文献リストを作りました。そこから中大連携の現状と課題を分析し、今後の展開について考察しました。地道な研究が続きましたが、ほかのゼミ生と協力して取り組むことでゼミ内での結束力が高まり忍耐力も鍛えられました。今年の1月には人材バンクについて福岡県の方からお話を伺うことができ、貴重な調査を行うことができました。これについても内容を整理して来年の研究に繋げていきたいと考えています。

キャリア探究Ⅱ-E

教育活動における中大連携の現状と課題

—事例のメタ分析の試行的実施—

江崎公貴 菊池迪央 小林計介 田村怜也

1. はじめに

本稿では、教育機関における地域連携・地域貢献のあり方について、事例のメタ分析を用いて、その成果と課題を整理する。その結果をもとに、大学と初等中等教育機関の連携のあり方について検討することが目的である。はじめに、大学と地域連携についてであるが、国立大学法人法第三款第22条3項において、「当該国立大学法人以外の者から委託を受け、又はこれと共同して行う研究の実施その他の当該国立大学法人以外の者との連携による教育研究活動を行うこと。」と明記されている。次に、初等中等教育と地域連携についてであるが、中教審『新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申)』によると、「社会に開かれた教育課程」を柱とする学習指導要領の改訂に伴い、学校と地域の連携・協働の重要性が指摘されている。

このように、大学と初等中等教育機関の相互で地域連携が重要視されている中、大学と初等中等教育機関がいかに連携するかという点もまた、論点の一つである。しかし、この研究については、事例報告としてのものが多くを占め、大学と初等中等教育機関とが連携して教育を行うことの成果や課題が体系的に整理されているといえない。そこで本稿では、大学と中学校との連携事例について調査を行った。調査については「事例のメタ分析」という手法を用いて各文献の内容について整理・分析を行った。

2. 方法

2.1 事例のメタ分析とは

メタ分析とは「同一のテーマについて行われた複数の研究結果を統計的な方法を用いて統合すること」であり、「特に研究で報告された統計情報(分析結果)を利用して研究の統合を行うため、その対象は実証的研究に限られることになる。つまり、従来のメタ分析を用いた研究は、複数の量的研究の結果の統合を図るものであり、質的研究はその対象とならない。しかしながら、量的研究におけるメタ分析が発展していくに当たり、質的研究においても各研究成果を統合する方法論が模索されるようになり、発展途上ではあるものの、その手法の開発が進んでいる。

2.2 二次研究の選定と評価基準の作成

大学と中学の連携について、その直近の動向を把握するため、「Cinii Articles」の検索機能から「タイトル検索」を用いて「中学 大学 連携」を検索語として2018年3月までの文献を検索したところ、140件の文献が表示された。その内、明らかに大学と中学連携について取り扱っていないものを取り除いたうえで、文献の概要をGoogleスプレッドシート上にとりまとめた。当該Googleスプレッドシート上では、各文献について、どのような「成果」と「課題」が指摘されているかをとりまとめた。特に「成果」については、教育という側面に着目し、「中学生にとってどのような教育上の効果が見受けられたか」「大学生にとってどのような教育上の効果が見受けられたか」「教育を実施する側の中学校教員にとってどのような効果が見受けられたか」という3点について整理をした。

| No. | 著者 | 発表年 | 発表場所 | 研究目的 | 調査対象 | 調査方法 | 調査結果 | 考察 |
|-----|-------|------|---------|--------------------------------------|-----------|---------|-----------|-----------|
| 1 | 山田剛史 | 2012 | 東京大学出版会 | メタ分析入門-心理・教育研究の系統的レビューのために- | メタ分析の手法 | 系統的レビュー | メタ分析の手法 | メタ分析の手法 |
| 2 | 今野理恵 | 2016 | 学会特別企画1 | 質的研究のシステムティックレビューの国際的動向 | 質的研究のメタ分析 | 系統的レビュー | 質的研究のメタ分析 | 質的研究のメタ分析 |
| 3 | 宮崎美砂子 | 2008 | 『看護研究』 | 質的研究のメタ分析の創出-Patersonらによるメタスタディを中心に- | 質的研究のメタ分析 | 系統的レビュー | 質的研究のメタ分析 | 質的研究のメタ分析 |

3. 結果

中学生への教育上の効果

最も多く見られたのは「興味、関心、意欲の向上」についての記述。次に多く見られたのは「コミュニケーション能力の向上」についての記述。その他としては「進路意識」の醸成や「研究手法」「ものづくりスキル」「情報工学」「文章表現」といった専門知識の習得に繋がるもの。「中学校だけでは実施が難しい活動を大学との連携により可能とした」という普段できない教育活動を実施できたこと自体を評価する記述なども見られた。

大学生への教育上の効果

まず見られたのが教育課程を履修している学生にとっての指導力の向上についての記述。また、それ以外の学生の効果についても、普段接することのない子どもに対しての指導を行うという経験から「説得力を持って説明できる能力」の習得につながったとする記述もあった。

中学校教員についての効果

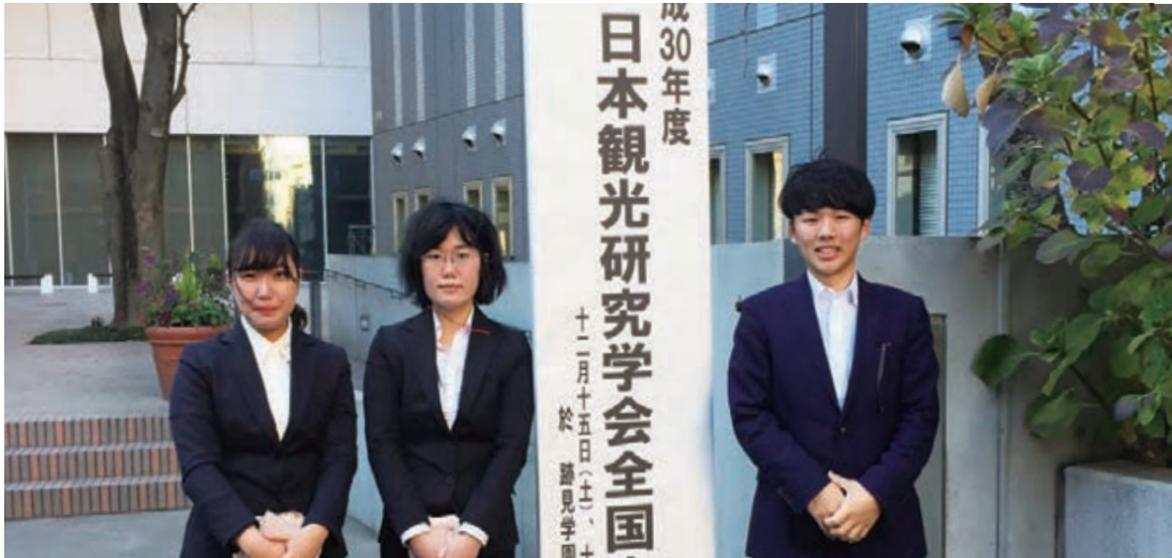
最も多かった記述としては「教材研究」に繋がるというものである。中学校という組織の中だけでは接することの難しい体験や専門知識の享受をきっかけとして、普段の教材研究に新たな視点を得られたという記述が見られた。

5. 今後の課題

- 連携活動の継続
- 連携活動の振り返りと改善の取り組み
- 中学校と大学の双方への利点
- 片方への偏り
- 活動後の「効果」の検証
- 感想文ベースの分析が多く、信頼性が低い

主な参考文献

- (1) 山田剛史、井上俊哉 編『メタ分析入門-心理・教育研究の系統的レビューのために-』東京大学出版会(2012)。
- (2) 今野理恵「学会特別企画1 質的研究のシステムティックレビューの国際的動向」『日本看護学会誌』17巻、3号(2016)。
- (3) 宮崎美砂子「質的研究のメタ分析の創出-Patersonらによるメタスタディを中心に」『看護研究』41巻、5号、pp359-366(2008)。



観光地域づくりの現状と課題を分析する

科目名 キャリア探究 I・II・F (3 回生) 担当者名 佐藤 充

演習の概要

本演習は、研究のデザインとプロセスを理解し、自らの問題意識に立脚した研究計画の策定とその実施が目的であった。一年を通して、各学生は観光地域づくりに関する問題意識に基づいて、先行研究のサーベイや既往調査のデータの収集・分析に取り組んだ。また、個人研究とあわせて、京都観光圏における課題をテーマにした調査プロジェクトを企画し、京都舞鶴港クルーズ船の乗船者を対象にした調査票調査を実施し、その結果を分析した。調査プロジェクトの成果は、日本観光研究学会の学生ポスターセッション、京都から発信する政策交流大会において発表された。あわせて、クルーズ船の乗船プログラムも設け、学生1名が参加した。



学生の気づき・コメント

小谷 大喜 | 地域経営学科 3 回生 兵庫県立村岡高等学校 (兵庫県) 出身

今年度、私は、2つのことに力を入れて取り組み、分析作業の大変さと、それに費やした時間から事実が明らかになった時の喜びを知りました。1つ目は、卒業論文のテーマ設定です。テーマは福知山市の大河ドラマ誘致に関するものに決め、基礎的な調査を行いました。大河ドラマを誘致した地域の先行事例を調べ、福知山市の担当者から誘致に係る観光政策についてヒアリング調査を実施しました。また、大河ドラマと観光地域づくりに関する講演を聞きに行きました。2つ目は、クルーズ船の乗船と調査についてです。今年度、京都舞鶴港に寄港したクルーズ船の船内見学会、また大阪大学大学院の赤井研究室が主催する「スマート・クルーズ・アカデミー」に参加し、クルーズ船観光を実体験してきました。他方で、昨年12月の京都政策交流大会において、京都舞鶴港で行ってきた調査票調査の分析を行い、舞鶴港の特徴を明らかにしました。

大槻 彩里 | 地域経営学科 3 回生 京都共栄学園高等学校 (京都府) 出身

今年度の演習では、クルーズ船をテーマにグループと個人で取り組みました。グループワークでは個人で調べたものを合わせポスター発表用の原稿を完成させました。個人ワークではクルーズ船が寄港することによる寄港地域への影響をテーマに取り組みました。過去の観光クルーズ船寄港地での事例を調べ、そこから地域への影響を経済、社会、環境の視点から整理し、プラスの影響とマイナスの影響についてまとめました。

平野 沙知 | 地域経営学科 3 回生 和歌山県立新宮高等学校 (和歌山県) 出身

演習では、クルーズ船観光についての研究と卒業論文作成のための準備に取り組みました。クルーズ船観光についての研究では、ゼミ内で進捗状況を報告・共有しながら、学外での2つのポスター発表に挑戦しました。私は、日本観光研究学会で「国内におけるクルーズ船受入港湾の現状と類型化」をテーマにポスター発表を行いました。前学期は、クルーズ船観光に関する動向について調べ、クルーズ船受入港湾の寄港回数やアクセスシビリティ、港湾の施設規模についてのデータ収集に励みました。後学期は、先生に教わりながら集めたデータの特徴を析出・分析し、実際にポスターを作成しました。ポスター作成を通じて、データ分析の手法や図表の魅せ方について学ぶことができました。さらに、学外で発表することで研究の成果について把握し、見直すことができとても良い経験になりました。

国内におけるクルーズ船受入港湾の現状と類型化

福知山公立大学 地域経営学部 地域経営学科 佐藤ゼミ (大槻彩里 小谷大喜 平野沙知)

① 本研究の概要

〈目的〉国内におけるクルーズ船受入港湾の現状を明らかにし、港湾の機能と地域との関係性の観点から、類型化を行うこと。

〈方法〉



〈対象〉2013~2017年にクルーズ船が連続寄港している60港湾のうち、受入回数の多い上位20港湾。

※有力観光資源数は、観光資源台帳に記載されているA級資源ランク以上の数とする。

② 分析結果

図1 アジア地域におけるクルーズ船受入回数の推移

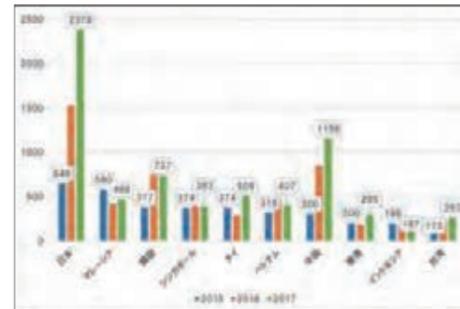


図2 日本国内におけるクルーズ船受入回数の推移

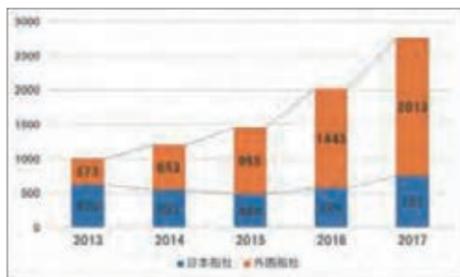


図3 地区区別でみたクルーズ船受入回数のシェア

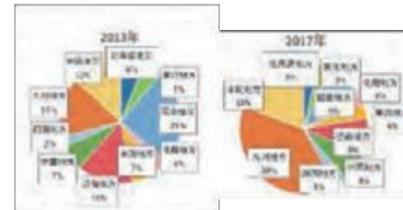


図4 過去5年間のクルーズ船受入回数の増減からみる類型化

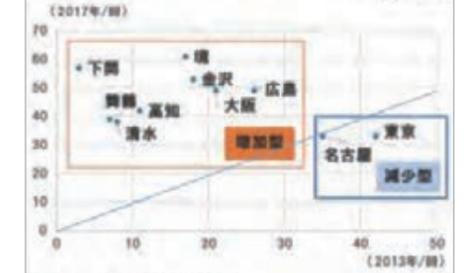
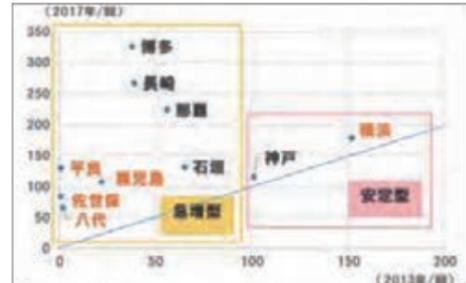


図5 港湾の特徴から見る類型化

| 港湾名 | 寄港回数 | 有力観光資源数 (半径50km圏内) | 市町村人口 (2015年/人) | 市街地までの距離 (徒歩/分) | 主要空港までの距離 (自動車/分) | 受入可能規模 |
|-----|------|--------------------|-----------------|-----------------|-------------------|--------|
| 横浜 | 安定型 | 26 | 3,774,844 | ~8 | 30 | 15~20万 |
| 神戸 | 安定型 | 23 | 1,837,273 | 8 | 15~20 | 15~20万 |
| 博多 | 増加型 | 5 | 1,834,681 | 10~15 | 20 | 15~20万 |
| 那覇 | 増加型 | 11 | 318,435 | 11 | 10 | 15~20万 |
| 東京 | 減少型 | 41 | 8,273,740 | 11~21 | 15~21 | 13~18万 |
| 大阪 | 減少型 | 34 | 2,611,168 | 20~30 | 30~40 | 15~20万 |
| 金沢 | 増加型 | 7 | 485,609 | 11~20 | 40~50 | 11~12万 |
| 宮 | 増加型 | 8 | 24,174 | 6~10 | 10~12 | 15~20万 |
| 広島 | 増加型 | 8 | 1,184,054 | 20~30 | 60~70 | 11~20万 |
| 長崎 | 増加型 | 8 | 426,600 | 8 | 40~50 | 11~20万 |
| 鹿児島 | 増加型 | 8 | 268,439 | 7~10 | 51 | 7~8万 |
| 鹿児島 | 増加型 | 8 | 860,814 | 25 | 50 | 11~12万 |
| 那覇 | 増加型 | 9 | 47,564 | 16 | 40 | 7~8万 |
| 那覇 | 増加型 | 8 | 704,989 | 20 | 50 | 11~12万 |
| 那覇 | 減少型 | 3 | 2,898,826 | 30~35 | 60~80 | 15~20万 |
| 那覇 | 増加型 | 3 | 81,000 | 10 | 30 | 11~12万 |
| 那覇 | 増加型 | 4 | 327,190 | 20 | 20 | 11~20万 |
| 那覇 | 増加型 | 2 | 294,517 | 0~15 | 80 | 5~11万 |
| 那覇 | 増加型 | 4 | 127,472 | 20 | 80 | 11~20万 |
| 那覇 | 増加型 | 5 | 51,188 | 10~20 | 10 | 7~8万 |

③ まとめ

- 過去5年間で受入回数が急増している港湾は、九州・沖縄地方に多い。
- 現在、発着港として機能している港湾は、横浜港と神戸港であるが、観光資源数やフライ&クルーズの観点から、博多港、長崎港、那覇港は潜在発着港であると考えられる。
- 寄港回数の増減には船の周遊ルートが関係している。

【参考文献】 -CRUISE PORT GUIDE OF JAPAN -JAPAN Cruise Port Association

-「観光資源台帳」(公開)日本交通公社 -「ASIA CRUISE TRENDS」CLIA

-「我が国へのクルーズ船の寄港回数及び毎日クルーズ船着数について」国土交通省

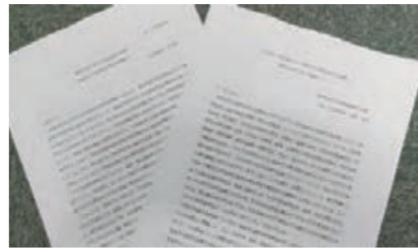


各自の関心にもとづく教育政策に関する問題についての テーマ設定と調査の実施

科目名 キャリア設計Ⅰ・Ⅱ-G(4回生) 担当学名 江上 直樹

演習の概要

本演習では、履修者各自の関心にもとづき、教育政策分野における問題についてテーマ設定を行い、調査レポートの作成を行った。具体的には、履修者2名についてそれぞれ「小学校等との連携において期待される地方大学の役割—福山公立大学の事例から—」「探究学習における学校司書の役割—京都府立久美浜高等学校の事例から—」というテーマのもと調査を行った。前者については、教育環境の地域間格差という観点に着目し、その一事例として大学生による学習支援の取り組みについて質問紙調査を行い、その結果から教育環境の地域間格差を是正するための地方大学の役割について考察した。後者については、アクティブラーニングや探究学習の導入が進められている学校教育について、学校図書館司書の役割について着目し、久美浜高校への現地調査をもとに学校図書館司書の重要性について考察した。



学生の気づき・コメント

伊井 恵 | 地域経営学科 4回生 兵庫県立村岡高等学校(兵庫県)出身

私が学校図書館というテーマを設定したきっかけは、幼少時から本が好きで、小・中・高と学校図書館によく通っていたという経験によるものである。学校図書館は、学校教育の中の他の分野と比較し余り注目されない分野ではあるが、この研究を通して、学校図書館が学校教育の中でもっと重要視されていくべきであると感じた。また、京都府立久美浜高等学校の学校司書の伊達深雪氏にインタビュー調査を実施した際に、学校図書館の抱える様々な課題や学校図書館の可能性について知ることができた。反省点としては、1年間という限られた時間での研究だったため、研究らしい研究ができなかったことである。3年次から取り組んでいればもっと研究を深めていくことができたのではないかと感じる。レポートについては、もっと早くから取り組みがあればより完成度の高いレポートになったのではないかと感じている。

小出 見子 | 地域経営学科 4回生 京都府立東舞鶴高等学校(京都府)出身

前年度に引き続き、「大学生の学習支援」をテーマに設定した。今年度は福山市教委が事業化したことにより「福山公立大学生による小学校学習支援活動」の幕開けの年となった。学生に対して調査した結果からも、児童と向き合う学生の真摯な姿や、大学生とともに学ぶ児童の喜びを読み取ることができた。本学の使命である地域貢献が果たせた事例として、私も喜びを感じた。小学校、大学、教委の三者が連携を深め、さらに充実していくことに着目し続けたい。ゼミについては、レポートを書いてまとめるのが精一杯で、もっと積極的にかつスピード感を持って取り組みれば内容についての議論ができ、さらに深めることができたのではないかと反省している。社会人学生ばかりのゼミで、先生も少し勝手が違ったかもしれないが、最後まで丁寧に指導していただき感謝している。ゼミで学んだ「果たして本当にそうなのか？」と根拠を探る気持ちをこれからも持ち続けたい。

小学校等との連携における地方大学の役割 —福山公立大学の事例から— 小出 見子

1. はじめに
 ・2006年の教育基本法改正、2015年の『まち・ひと・しごと創生「長期ビジョン」と「総合戦略」』→大学の社会貢献を重視
 ・2000年の学習指導要領改定、2004年のコミュニティスクール創設、2008年の学校支援地域本部創設→学校の内外人材協働の推進
 ①学校の内外人材協働の推進について、大学生ボランティアに着目し、現状をまとめ、福山公立大学生の学習支援活動について考察する。

2. 先行研究のまとめ
 ・小出ら(2011)：大学生ボランティアによる学校支援活動の実態についてアンケート調査、多くの学校が大学生ボランティアに期待を寄せていることが明らかで、学校と大学生との「連携し役」としての専門的知識であるボランティアコーディネーターの活用が必要としている。
 ・西村ら(2016)：ボランティア学生が活用した事例に対する意識調査を実施し、大学生ボランティアの活用が活用方法も特異し、学生ボランティアの活用が地域の活性化に大きく影響を与える、学生ボランティアに対する事前の打ち合わせがボランティアの効果を高めるという結果に。

3. 調査の概要
 京都府教育委員会「2016年度小学生」支援プログラムにおける学習支援ボランティアの活用実態について、各教育委員会に調査依頼。

| | 丹後教育圏 | 中丹教育圏 | 南丹教育圏 | 乙訓教育圏 | 山陰教育圏 |
|------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 調査する学校数 | 45校 | 72校 | 41校 | 25校 | 112校 |
| 活用した学校数 | 3校 | 9校 | 15校 | 17校 | 40校 |
| 活用した学校の割合 | 6.7% | 12.5% | 36.6% | 68.0% | 35.7% |
| 活用した大学生の人数 | 3人 | 9人 | 36人 | 58人 | 233人 |

4. 調査内容「福山公立大学による小学校学習支援活動」における学生の意識調査
 ・2017年度に14学校にて実施し、2018年度より4小学校を対象に「福山公立大学による小学校学習支援活動」として実施
 ・対象校に参加した大学生向けに質問紙調査を実施
 一学生の調査対象は4小学校合計で20日、学校別でA小学校25日、B小学校9日、C小学校16日、D小学校9日であった。
 一学習支援の内容は、プリント学習の補助等の学習的支援と、読書の楽しみの提供などの精神的支援。
 一児童からは、教科書の内容だけでなく大学や大学生自身への関心もあり、子どものキャリア教育の機会につながっているとも考えられる。
 一大学生自身も児童への伝達方を考えたり、相手の気持ちをくみ取る努力をしている、本質的な関心にもつながるといった感想をもつ学生も。
 一一部とってはメールで送られてきて事前学習ができる学生と、事前学習がなく小学校の先生と自分の教え方によって困っている学生もいるなど小学校の対応にはいろいろある。また、勉強に集中してくれない児童への相手がわからないなど、専門的知識が必要という感想も。

5. 課題
 事前研修が実施されており、受け入れる小学校の調査ができていないこともあり現状は不十分である。しかし、「連携のための大学」を使命とする本学にとっては、互いの地域貢献意識が共有できているということが前提条件からならなかった。そのことをさらに実現するためにも、今後も調査を続けていく必要がある。また、調査が小出ら(2011)が調査のマンパワー不足を補ったことによる結果として適切に活用することを想定しているが、そうならないためにコーディネーターの役割と三者による連携の重要性も不可欠であると考える。

探究学習における学校司書の役割 —京都府立久美浜高等学校の事例から— 伊井 恵

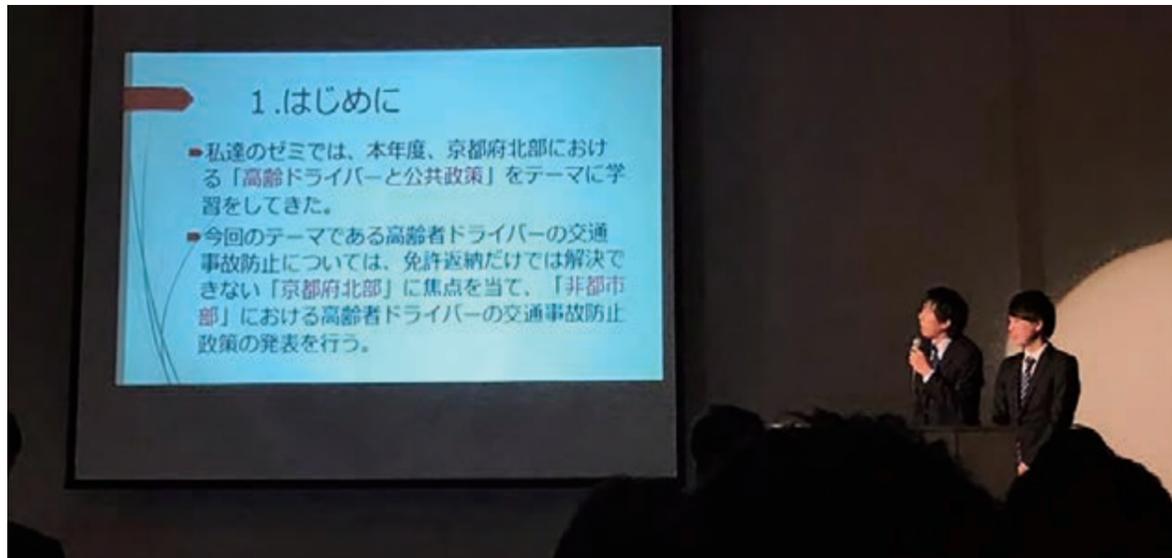
1. はじめに
 ・2000年頃の高等学習支援推進型 → 探究的な学習の重視 → 総合的な学習の時間等においては学習支援館を活用することも拡大
 ・野村(2010)：高等学校では、教育課程においても、また教育方法においても、学習支援館を活用しようという動きはまだ十分とはいえず、①研究では、探究学習における学校司書の役割に着目し、その現状と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究の概要
 ・高田(2010)：高等学校の探究学習支援活動に関する、学校司書の活用は限られている。機会が多かったとしている。更に調査から、学校司書の「資料や情報の提供に関する役割」をしていないことが分かっている。

3. 調査方法
 ・先行事例として、京都府立久美浜高等学校の学校司書を対象に調査。2018年12月7日(日)に学校司書にインタビュー調査を実施し、学校司書にインタビュー調査(半構造的インタビュー)を実施。

4. 結果と考察
 ①学校司書の活用状況
 一文科系学習の平均28年度「学校司書の役割に関する調査」の結果によると、学校司書の活用状況は、小学校が22%、中学校が28%、高等学校が66%である。なお、調査の学校司書の活用状況は、小学校は4%、中学校は7%、高等学校は6%である。
 一インタビューより「京都府立久美浜では、学校司書の活用は限られている。活用しているものも3校のみである。1校につき週に1、2回の書籍では、業務が忙しすぎる」とのこと。
 ②探究学習における学校司書の役割
 一インタビューより「探究学習で学習支援館を活用するかどうかは、授業の担当教員の認識と立場に左右されている。学校司書としてできることは、教員の学校司書活用への促進である」
 一小出ら(2011)：現在の学校司書の活用状況は、学校司書の業務・負担については明確な認識は存在しているが、
 一「平成30年度探究学習推進型授業に関するアンケート」：公立小学校1校当たりの年間購入予算額は、長岡京市で約28万円、南丹市で約15万円、福山県で約15万円。

③探究学習における学校司書の役割の課題について整理すると、①探究学習担当教員の学校司書活用に対する認識不足、②学校司書の業務負担の状況による資料や情報の不足、③探究学習の人的資源の状況による学校司書の認識やスキル不足が挙げられる。



京都府北部における高齢者ドライバーの交通事故防止政策

科目名 キャリア設計Ⅰ・Ⅱ-E(4回生) 担当名 杉岡 秀紀

演習の概要

本演習では、「京都府北部における高齢者ドライバーの交通事故防止政策」をテーマに文献輪読、調査、政策コンペでの提言に取り組んだ。ゼミ生が少人数であったため、隔週で課題発表があったり、受講学生にとっては大変であったと思うが、その分力が付いたと推察される。政策コンペでは京都府警主催の「ポリス&カレッジin KYOTO 2018」において、「京都から発信する高齢運転者の交通安全」という共通テーマのもと、京都の7大学8チームが出場し、本ゼミ生が「京都府北部における高齢者ドライバーの交通事故防止政策～免許返納至上主義を超えて」と題し発表。半年間の研究成果を発表。上から2番目の賞に当たる優秀賞を受賞した。



学生の気づき・コメント

藍畑 祐介 | 地域経営学科 4回生 和歌山県立田辺高等学校(和歌山県)出身

杉岡ゼミでは座学やフィールドワークにおいて、これから学んでいく内容や活動拠点となる地域を決める際に、杉岡ゼミを受講する学生の将来の方向性や意向に出来る限り沿えるように、学生の意見を取り入れるなど、1年間学びを深めて行く上で、自分が意欲的に取り組めるような工夫がされているため、毎講義ある座学やフィールドワークの活動に対して熱心に取り組むことができました。座学とフィールドワークのバランスが良く、双方がしっかり関連しており、座学をインプットとして学び、フィールドワークでしっかりアウトプットをしていくため、1年間を通してしっかり学びが身につきました。

また、免許返納についてのアンケート調査などだけでなく、京都府警のポリス&カレッジの様に発表する機会があり、他大学の参加や賞なども用意されていたため、どれだけの力が付いたのかという認識もでき、そこで成果をあげることができたので自信にもつながりました。

小谷 祐史 | 地域経営学科 4回生 兵庫県立八鹿高等学校(兵庫県)出身

杉岡ゼミは大きく座学とフィールドワークに分けられます。今期の座学では著書『高齢ドライバー』を元に京都府北部における高齢者ドライバーについての学習を行いました。フィールドワークでは、京都府交通安全委員会とともに免許返納についてのアンケート調査などを行いました。また、私たちの研究成果を発信する場として、京都府警主催のポリス&カレッジというイベントに参加し、高齢者ドライバーの事故対策というテーマに基づき発表を行いました。結果は優秀賞という素晴らしい賞を頂くことができ、とても満足しています。このゼミでは、学習テーマについて、行政、市民の視点から学び、考えることができます。公務員志望の方にもってこいの講義です。そして、研究したことについての成果発表の場があるため、プレゼン力も付き、とても充実した有意義な時間を過ごすことができました。先生の経験談も私にとってはとても貴重な情報で毎回楽しみにしていました。

キャリア設計Ⅰ・Ⅱ(杉岡ゼミ)

「京都府北部における高齢者ドライバーの交通事故防止政策」

藍畑祐介、小谷佑史(4年生)

京都府北部における高齢者ドライバーの交通事故防止政策 ～免許返納至上主義を超えて～

福知山公立大学 地域経営学部 杉岡ゼミ
藍畑祐介 小谷祐史

1.はじめに

- 私達のゼミでは、本年度、京都府北部における「高齢ドライバーと公共政策」をテーマに学習してきた。
- 今回のテーマである高齢者ドライバーの交通事故防止については、免許返納だけでは解決できない「京都府北部」に焦点を当て、「非都市部」における高齢者ドライバーの交通事故防止政策の発表を行う。

2.先行研究

免許返納についてどうしたいか
(N=舞鶴・福知山・和田山・豊岡の高齢者500)
免許返納について

7割を超える高齢者が返納したくないと回答

3.現状分析

【京都府内における交通事故発生件数・負傷者数】

| | 発生件数 | 負傷者数 |
|------|--------|---------|
| H16年 | 19,590 | 24,162人 |
| H29年 | 7,145 | 8,530人 |

H16年からH29年まで13年連続で発生件数・負傷者数ともに減少している。

4.政策提言

- ①免許返納+地域公共交通を充実させる政策
- ②免許返納しない+技術革新+ふるさと納税を活用する提案

5.参考文献

- 所正文はか『高齢ドライバー』文藝春秋、2018
- 京都府警『高齢者運転者交通安全対策』、2018
- 北近畿地域連携会議『高齢者講習受講者向けアンケート』、2017
- NPO法人「気楽なふるさと丹後町」ホームページ
(<http://libon-havato-tanago.or.jp/>)、(2018年11月15日閲覧)
- 兵庫県法務部民局『Uber概要資料』、2018

福知山公立大学
The University of Fukuchiyama



地域協働型 実践教育成果報告会

2018年度地域協働型実践教育成果報告会を2月16日(土)に本学で開催し、学生が一年間の学びの成果を発表した。1年生はそれぞれ15分で発表し、発表テーマは文化資料のアーカイブ化や調整池の利活用、地域交通の再編、学校の統廃合による校舎の使い道、商店街調査、プロモーションビデオの作成など多岐にわたった。発表後の質疑応答により更に理解を深めた。

3年生は研究テーマをまとめたポスターを展示し、来場者に説明するポスターセッションを行なった。当日は多くの地域の方にもご参加いただき、会場内の様々な場所で北近畿地域をフィールドとした実践教育での取組みが発表された。



1回生科目「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ」の発表スケジュール

| | 101 教室 | 102 教室 | 103 教室 | ポスター発表 |
|-------|---|---|--|---------------------|
| 10:00 | 挨拶等 | | 挨拶等 | |
| 10:10 | Aクラス①(平野・井上) 「北近畿のまちを訪問して」 | Gクラス②(神谷・江上) 「夜久野町における文化資料のデジタルアーカイブ化」 | Eクラス③(杉岡・三好) 「弘法川調節池利活用プロジェクト」 | |
| 10:40 | Bクラス①(矢口・中尾) 「農業の衰退と農業の今後～(株)Seasonの活動の例から～」 | Aクラス②(平野・井上) 「シャッター商店街に住む人々の思い～アンケート調査を通して～」 | Fクラス④(斎藤・佐藤充) 「由良川と水害」 | |
| 11:10 | Cクラス①(芦田・星) 「社会福祉協議会が地域防災において果たす役割は何か？」 | Bクラス②(矢口・中尾) 「学校の統廃合～残された校舎の使い道～」 | Aクラス③(平野・井上) 「住みたいまち、行きたいまち」 | |
| 11:40 | Dクラス①(谷口・加藤) 「Dクラス presents 防災飯 in 内田町自治会」 | Cクラス②(芦田・星) 「社会福祉協議会がコーディネートする居場所づくり活動とは？」 | Bクラス④(矢口・中尾) 「三和地域交通の再編を目指して～三和地域公共交通空白地有償運送事業の考え方と現状～」 | |
| 12:10 | 休憩 | | | |
| 13:00 | ポスターセッション(3階セミナー室) | | | |
| 14:00 | 後半挨拶・準備 | 後半挨拶・準備 | 後半挨拶・準備 | 3年生による ポスターセッション |
| 14:10 | Eクラス①(杉岡・三好) 「ゆらのガーデンにぎわいプロジェクト」 | Bクラス③(矢口・中尾) 「大原神社から地域振興へ」 | Dクラス②(谷口・加藤) 「商店街の遊ビバ in さいとう家具店」 | |
| 14:40 | Fクラス①(斎藤・佐藤充) 「大江町の移住・定住対策」 | Eクラス②(杉岡・三好) 「京都府中丹西土木事務所 PV 作成プロジェクト」 | Gクラス③(神谷・江上) 「夜久野町における文化資料のデジタルアーカイブ化」 | |
| 15:10 | Gクラス①(神谷・江上) 「夜久野町における文化資料のデジタルアーカイブ化」 | Fクラス②(斎藤・佐藤充) 「大江高校と地域づくり」 | 終了 | |
| 15:40 | 待機 | 終了 | | |
| 15:50 | 全体講評 | | | |
| 16:00 | 終了 | | | |

ポスター発表一覧

| 番号 | 学年 | ポスターテーマ | 担当教員 | 部屋番号 |
|----|----|--|------|------|
| 1 | 3 | 物流子会社のデータから見る今後の展望 | 篠原 | 302 |
| 2 | 3 | 海運業界研究 | 篠原 | 302 |
| 3 | 3 | 国際物流における航空の在り方 | 篠原 | 302 |
| 4 | 3 | 学生の古里の郷土料理をテーマにした地域交流活動モデルの提案 | 谷口 | 303 |
| 5 | 3 | Tシャツを通してエンカルファッションへの関心を高める試み～Tシャツアートと環境問題in福知山ワンダーマーケット～ | 谷口 | 303 |
| 6 | 2 | エックス系移住～全国の「移住熱源」の可視化と編集による価値創出 | 塩見 | 304 |
| 7 | 3 | 「天職観光」(天職のヒントを探す旅)～オーバーツーリズム時代の新しい旅の提案～ | 塩見 | 304 |
| 8 | 3 | 鉄道貨物について | 篠原 | 306 |
| 9 | 3 | 物流業界について | 篠原 | 306 |
| 10 | 3 | 陸運について | 篠原 | 306 |
| 11 | 3 | 「1人1プロジェクトリーダー制による地域創生とキャリア開発」 | 杉岡 | 307 |
| 12 | 3 | TPP参加に伴う農業への影響試算-京都府下の市町村のケース- | 三好 | 307 |

1回生科目「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ」各クラスの取り組み概要

「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-A」(担当教員:平野 真、井上直樹) ——

私たちは、地域の人々との交流を目的として、大江二俣和紙による灯籠づくりを、地元の小・中学生やろうあ者の方々と行った。子供達には、地域の文化資源の大切さを教え、私たちも共通の目標に向かって協働することを体験した。また、福知山市、綾部市、篠山市、舞鶴市などを視察し、町々の比較から、自分たちの「住みたい町、行きたい町」について考えた。その結果、生活の利便性のみならず、子育て環境の重要性、その基礎としてのまのちの人々の交流や連帯感の大切さを学んだ。これらの学習を踏まえて、福知山市の中心市街地について、住民の方々の望むまちのあり方について意識調査を行い、自分たちが「まちづくり」に関して何ができるか考え始めた。発表会では、Aクラス①とAクラス③は訪問した町の良さの紹介と自分たちの住みたい町、行きたい町についての報告、Aクラス②は町の人々との交流と福知山市中心市街地でのアンケート調査を中心に考えたことを報告する。

「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-B」(担当教員:矢口芳生、中尾誠二) ——

本クラスの演習は、福知山市社会福祉協議会(以下、社協)の全面協力の元、地域における「居場所づくり」と「地域防災」をテーマとして、学生を2チームに分けて実施した。まず、地域における高齢者サロン活動や地域の防災イベントなどに参加、および手伝いを体験することにより、地域における社協の役割と地域の福祉活動のニーズについて学んだ。また、今年度発生した福知山市内の自然災害に際し、ボランティアセンターの運営の中心に社協があることも、災害ボランティアの体験を通じて学んだ。今年度後半には、学園祭における地域の参加者のための居場所づくり、地域の祭事における防災グッズ提供、消防団への講習会などを社協、および地域の民生委員と協力して実施した。なお、今年度は台風や水害により、高齢者サロンによる地域イベントや地域の防災イベントが中止となり、地域に赴いての演習をいくつか経験できなかった。この点から、本演習を地域イベントに依存する形で組み立てることがいかに危ういかを痛感した。

「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-C」(担当教員:芦田 信之、星 雅文) ——

本演習では、「PBLから考える福知山の公共経営」をテーマに1年間演習を行った。具体的には、17名の受講生を、①ゆらのガーデンにぎわいプロジェクト(パートナー:福知山まちづくり会社、福知山ガーデンサークルゆらら)、②京都府中丹西土木事務所PV作成プロジェクト(パートナー:京都府中丹西土木事務所)、③弘法川調節池利活用プロジェクト(パートナー:同上)の3グループに分け、活動を展開した。いずれもテーマをパートナーから頂き、パートナーからの情報提供や現地でのフィールドワークを経て、提言を行うと共に、成果物も制作した。また、全体の活動として経済界や他大学生、高校との対話事業も実施した。

「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-D」(担当教員:谷口知弘、加藤好雄) ——

自治会と商店街をフィールドに、2チームが問題発見から解決を試みる小さなプロジェクトを実践した。①内田町自治会チーム「Dクラス presents 防災飯 in 内田町自治会」プロジェクト:「地域の防災への関心」をテーマに現状を把握し、住民の防災知識の習得を目指す自治会活動に若者の立場で参加した。内田町自治会のハザードマップ作成への参加と新しい非常食の提案・評価を行った。新しい非常食の取り組みでは、防災訓練でワークショップを実施し福知山市危機管理課に提案を行った。②新町商店街チーム「大学生と遊ぼう!商店街の遊ビバ in さいとう家具店」プロジェクト:かつての賑わいが消えた新町商店街に誰でも気軽にける遊び場を設ける事で子どもや地域の皆さんの笑い声が響く空間を作り、商店街に新たな賑わいをつくる試みを行った。元さいとう家具店を会場に、12月と1月に計8回の「遊ビバ」を開き、大学生と子どもに加えて保護者や近隣住民など新たな来訪者が集い交流する場をつくることができた。

「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-E」(担当教員:杉岡秀紀、三好ゆう) ——

本演習では、「PBLから考える福知山の公共経営」をテーマに1年間演習を行った。具体的には、17名の受講生を、①ゆらのガーデンにぎわいプロジェクト(パートナー:福知山まちづくり会社、福知山ガーデンサークルゆらら)、②京都府中丹西土木事務所PV作成プロジェクト(パートナー:京都府中丹西土木事務所)、③弘法川調節池利活用プロジェクト(パートナー:同上)の3グループに分け、活動を展開した。いずれもテーマをパートナーから頂き、パートナーからの情報提供や現地でのフィールドワークを経て、提言を行うと共に、成果物も制作した。また、全体の活動として経済界や他大学生、高校との対話事業も実施した。

「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-F」(担当教員:齋藤達弘、佐藤充) ——

本クラスの演習では、福知山市大江町の地域課題を題材にして、①大江町の移住・定住対策、②大江高校と地域づくり、③由良川と水害の3つのグループに分かれ、文献調査や現地調査に取り組んだ。①のグループは、福知山市の担当者や旧大江町の元職員へのインタビュー調査を行い、旧大江町及び福知山市における移住・定住対策の変遷とその実態を分析するとともに、他の地域の事例を参考に、大江町の移住・定住対策の方向性を示した。②のグループは、京都府立大江高等学校の地域創生に向けた取り組みに着目し、高校の魅力化プロジェクトの事例を通して、大江高校と地域づくりのあり方を考察した。③のグループは、大江町を流れる由良川への地域住民の想いや愛着をインタビュー調査によって明らかにし、水害という側面だけではなく、親水という視点から由良川との関わりを再考することを指摘した。こうした調査結果は、現地での成果発表会(2019年1月)において、地域の方々に報告された。

「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-G」(担当教員:神谷達夫、江上直樹) ——

本発表は、福知山市夜久野町をフィールドとし、夜久野町における文化資料をデジタルアーカイブ化する作業をもとに、地域の文化資料をデジタルアーカイブとして保存することの意義と課題について報告するものである。報告では、まず初めに、地域の文化資料のデジタルアーカイブ化の先行事例について「文献資料」「有形文化財」「無形文化財」という3点を軸にそれぞれ紹介する。その後、夜久野町における文化資料のデジタルアーカイブ化の作業について、「文献資料」として夜久野町に関連する論文リストおよび本文へのリンク集の作成、「有形文化財」として「夜久野高原八十八ヶ所石仏」の写真および位置情報データの収集・整理、「無形文化財」として「額田のダン祭り」の映像データの収集・整理について報告する。今回の取り組みにより「夜久野町史」等の文献資料のみの状況と比較して地域文化に関する情報について共有しやすい環境を構築することができたが、情報量についてはまだまだ不足しており、今後においても継続的取り組みが必要である。

| 番号 | 学年 | ポスターテーマ | 担当教員 | 部屋番号 |
|----|----|---------------------------------------|------|-------|
| 13 | 3 | 地域の特産物 商品開発への挑戦 | 平野 | 307 |
| 14 | 3 | 教育活動における中大連携の現状と課題 —事例のメタ分析の施行的実施— | 江上 | 308 |
| 15 | 3 | 国内におけるクルーズ船受入港湾の現状と類型化 | 佐藤充 | 308 |
| 16 | 3 | 三重県厚生農業協同組合連合会 鈴鹿中央総合病院 | 星 | 4階会議室 |
| 17 | 3 | 恩賜財団 済生会横浜市東部病院 | 星 | 4階会議室 |
| 18 | 3 | 市立福知山市市民病院 | 星 | 4階会議室 |
| 19 | 3 | 医療法人溪仁会 手稲溪仁会病院 | 星 | 4階会議室 |
| 20 | 3 | 日本赤十字社 伊勢赤十字病院 | 星 | 4階会議室 |
| 21 | 3 | 社会医療法人神鋼記念会 神鋼記念病院 | 星 | 4階会議室 |
| 22 | 3 | 三田市民病院(兵庫県) | 星 | 4階会議室 |
| 23 | 3 | 安雲野赤十字病院(長野県) | 芦田 | 4階会議室 |
| 24 | 3 | 綾部市立病院 | 芦田 | 4階会議室 |

学生プロジェクト01

子どもの居場所づくり

プロジェクトの目的

子どもたちへの食事の提供・学習支援を行う「こども食堂」の取り組みが全国的にも普及し始めている。本プロジェクトでは、出生率の高い福知山市において、子どもたちの居場所や、保護者の負担軽減に寄与することを目的としている。

プロジェクトの内容

本プロジェクトの活動内容を大別すると、①メニュー決め等の実施・当日の企画、②食材集め等の実施・当日のための準備、③当日の運営に分けられる。

①については、自分たちで考えたメニューを協力団体である「にじいろ食堂」に提示し、調理していただいた。②については、当日に必要な食材や物品の購入に加えて、地域の方々から野菜やお米等食材を寄付いただいた。③の当日の運営について、実施日および参加人数については以下の通りである。

- ・11月6日 参加人数：子ども6人（運営学生8人）
- ・11月20日 参加人数：子ども10人（運営学生6人）
- ・12月4日 参加人数：子ども13人（運営学生6人、教員1名）

- ・12月18日 参加人数：子ども13人（運営学生9人、教員1名）
- ・1月22日 参加人数：子ども10人（運営学生5人）
- ・2月19日・3月26日活動予定

プロジェクトの成果

○学生プロジェクトのメンバーにとって

- ・様々な意見がある中で、他の意見に流されすぎずに自分たちの本当の目的を貫くことの大切さを知ることができた。また、協力して下さる方々との連携の大切さがわかった。
- ・報告・連絡・相談の大切さを実感した。
- ・プロジェクトをするにあたっての責任感が芽生えた。

○活動地域にとって

- ・参加した子どもからは「楽しかった」や「大学生になったらこども食堂をしてみたい」や「また開催して欲しい」といった感想があった。
- ・保護者の方々からは「食事や宿題をお世話になり、我々もひと息つく時間がとれ、親子ともに満足です」という声をいただいた。



学生プロジェクト02

ふくちやまデザインチャレンジ

プロジェクトの目的

私たちは、「デザイン」という定義の難しい対象こそが、大学生の柔軟で枠にとらわれない発想を活かすのに最も適していると考えた。その中で、新たなアイデアや若者の意見を求める企業や団体の声もあり、サークル活動とは異なり、ビジネス的要素も含んだプロジェクトを行った。

プロジェクトの内容

今年度は、レシート等に使用する「ロール紙」を生産する株式会社クリエイティアとの取り組みで、ロールタイプの紙石鹸の販促デザインを検討した。現在の販売先や購入者の声や、「あまりたくさん売れ過ぎても困る」という要望を踏まえて、「パッケージデザインに囚われず、売り方・売り込み先をデザインしたほうが良いのではないか」と思考し、多面的な観点から課題解決に取り組んだ。

プロジェクトの成果

○学生プロジェクトのメンバーにとって

- ・依頼者は企業であり、課題は決して易しいものではなかった。お金を頂いているわけではないが、解決への糸口を求められているのだという緊張感があった。
- ・各々の持つ知識や経験を総動員し、時に先生方の助言を得ながら進めていくなかで自分たちの無力さを痛感した。
- ・デザイン分野から派生し、必要とされる数多の知識や理論の習得が求められているのだと感じた。



学生プロジェクト03

ぶらすあるふあ

プロジェクトの目的

以前、綾部市で開催された「小さなアースデイ 2017」に参加した際にブースやステージ発表での賑わいがあった一方で、環境について考えるプログラムへの参加者が少ないと感じた。そのため、2018年に行われるアースデイでは「学び」に繋がるプログラムを強化することを目的に本事業を実施した。

プロジェクトの内容

小さなアースデイ当日に向けて、実行委員会のミーティング等に参加し、連携先と意見交換や打ち合わせを行った。当日は、本プロジェクトが考案したエコクラフトのブースを担当し、子どもたちを対象としたワークショップを行った。実施後は、反省会を兼ねた慰労会に出席し、当日の反省点や改善点について話し合った。

プロジェクトの成果

○学生プロジェクトのメンバーにとって

- ・ブースを運営する上で、具体的にどのような準備が必要なのかを考える力がついた。
- ・小さなアースデイ実行委員会の大力浩二さんや地域の方々とのミーティングを通して、実践的な視点からヒントを得た。また、アイデアを出し合うことで主体的に多様な人々と協働して取り組む態度が身に付いた。
- ・アースデイ当日は、学生スタッフにできるだけイベントの雰囲気を楽しんでもらえるように自由な時間を増やした。これにより、スタッフや地域の方々との交流が実現した。

○活動地域にとって

- ・綾部地域のイベントに大学生が入り、交流することができた。
- ・ブース出展によるワークショップの機会はもとより、大学生と地域の方々が出会うという枠組みを超えて交流することができた。
- ・「半スタッフ半参加者」として、運営スタッフと参加者の間に立つことで、どちらにとっても関わりやすく、双方を繋ぐポジションが取れていた。



学生プロジェクト04

みんなで作るやなせAtoZプロジェクト

プロジェクトの目的

兵庫県朝来市山東町の梁瀬地域では、若者の流出が一つの課題となっていた。そこで、地域の資源や魅力を若い世代にも知ってもらえる必要があると私たちは考えた。そのためには、外部ではなく内部にむけた情報発信が必要であるという結論に至った。

プロジェクトの内容

情報発信のツールに関して、本学の塩見直紀准教授が研究している「AtoZ」の手法を用いることにした。A-Zから始まるキーワードの収集にあたって、地元の高中生や自治協議会からもご協力いただいた。また、キーワードをまとめたミニブックの作成にあたっては、地域の写真を掲載するために地域住民の方々にもご協力をいただいた。そして、ミニブックのデザインや印刷は印刷会社に依頼するなど、多くの方々、団体に協力をいただきながらプロジェクトは進行した。

プロジェクトの成果

○学生プロジェクトのメンバーにとって

- ・全く知らない土地に入り、その土地の風土や文化を学ぶということが大変であるということを経験できた。現地の方にお話を伺って分かった部分もあったが、それ以上に自分たちで動かないと情報が集まらなかった。また、情報を集める作業の大変さを身をもって体験できた。
- ・プロジェクトを進める上で必要な打ち合わせや話し合いも、すべて自分たちで調整を行った。しかし、それぞれの大学生活がある中で予定をすり合わせて集まり、少しずつプロジェクトを進めることは本当に難しかった。
- ・今回のプロジェクトを通してそれぞれに責任感や作業の進め方など様々な気づきがあり、プロジェクトを経験した意義は非常に大きかった。



学生プロジェクト05

由良・安寿亭フェス

プロジェクトの目的

「由良・安寿亭フェス」は、宮津市丹後由良地区の特産品をPRするとともに、イベントなどを通じて住民の方々に自分たちの地域に対する誇りや活力を与えることを目的とし、安寿亭の方々と学生が協力して実施したプロジェクトである。

プロジェクトの内容

宮津市丹後由良地区の特産品 PR のため、摘果みかんとオリーブを使用した商品の考案と販売、イベント当日の会場設営、地元産農産物の販売、接客などを行った。特産品の PR では、摘果ジュースを使用した「摘果みかんのパウンドケーキ」と、オリーブオイル・オリーブの実を使用した「オリーブのパウンドケーキ」の2種類を提供した。「家庭でも簡単に作れる学生らしい商品」をコンセプトに、話し合いや試作を重ね、炊飯器で作れるレシピを考案した。

プロジェクトの成果

○学生プロジェクトのメンバーにとって

- ・特産品をどのようにアレンジすれば地域の方が目を向けてくれるのかを考え、試作し、実行する経験ができた。
- ・地域の方と交流するうちに、その地域の人の温かさや人と人とのつながりの深さを実際に目でみて体験することができた。
- ・イベントをより良いものにするためには、地域の方と大学生が等身大で話し合い、お互いに「気づき」を共有できる関係を持つことが大切であると学んだ。

○活動地域にとって

- ・異なる世代間同士が交流することにより、幅広い年代の方たちとイベントを盛り上げることができた。
- ・学生がイベントに参加することで、「学生」を地域の強みと感じてもらうための足掛かりとなった。
- ・イベント終了後に、イベントの反省点や改善点を安寿亭の方と学生で話し合ったことで、距離がより近くなったと感じることができた。



学生プロジェクト06

高齢者の健康と医療に関する研究

プロジェクトの目的

本プロジェクトは次の4つの項目を調査・分析することを目的とする。

1. 健康寿命と日常生活と運動の関係
2. かかりつけ医の知名度・普及度
3. 病院が近くにある地域に住んでいる高齢者と、病院に行くまでに時間がかかる地域に住んでいる高齢者とは通院の仕方や頻度が違うかどうか
4. 高齢者の薬の飲み忘れや同じ効能の薬を複数飲んでいるかどうか

プロジェクトの内容

上記の目的の調査方法として、福知山市街地と旧三町（三和・大江・夜久野）に在住の高齢者にアンケートを行った。このアンケート結果を集計し、得られた結果を研究報告書にまとめ、協力していただいた高齢者の方や市役所の方をはじめとする福知山市民の方々に報告、発表する。

プロジェクトの成果

○学生プロジェクトのメンバーにとって

本プロジェクトでは、アンケート調査と現地調査を行った。前者では、回答者への倫理的な配慮をしつつ、目的を果たすためどのような質問項目を挙げるか等、アンケート作成の難しさを学んだ。後者では、実際に現地に行くことで医療機関へのアクセス等の問題点を見つけ、考察することができた。また、これらの調査結果を多角的に捉え、分析する手法も身に付けることができた。

○活動地域にとって

福知山市はアンケートの分析結果から、薬を飲み忘れることが全国と比較して少ない傾向があることが分かった。また、福知山市街地と各旧三町では、薬の飲み忘れの地域差は見られなかった。しかし、地域によって運動の頻度や運動に対する意識が違うことが分かった。今後、分析結果から得られたデータを福知山市役所に報告する。



学生プロジェクト07

農業実践・実験プログラム

プロジェクトの目的

都市圏の学生が手間と時間が必要とされる農業のあり方を見直し、「週末農業」を試みることを目的とした。実験的に、トマトのソバージュ栽培を導入し、地元の農家の負担を軽減しながら、耕作放棄地の有効的な運用を模索する。また、農業体験を行うことで座学では感じ取れない農作に関する知識を深めることを目的とした。

プロジェクトの内容

調査は、農業を主産業とする与謝野町を対象とした。与謝野町の農家とともに、トマトのソバージュ栽培による週末栽培の実験を行った。畝作りから収穫までを各週に実施することで平常の農法と比べ、週末農業の収穫が可能であるかなど調査した。また、参加するメンバーに毎週、福知山市周辺から与謝野町に通うことに対する心理的な負担や、生活への影響についてアンケート調査を行った。なお、移動手段は主にバスである。

プロジェクトの成果

○学生プロジェクトのメンバーにとって

- ・多品種のトマトを同時に育てるなかで、品種によって時期や環境が大きく影響することを知った。
- ・野菜を育てる際に、地域の農家さんから教えていただいたことは知らないことばかりで今まで生産者から遠い距離にいたと感じた。
- ・収穫作業には、想定を超える手間がかかった。また、実り方が不規則であり、収穫の目安が曖昧だったため、初心者には見極めが困難だと感じた。

○活動地域にとって

- ・農業はIT化が遅れているといわれており、活動地域でも、経験則によって栽培から収穫の一連の作業を行っている部分が多かった。
- ・データの収集や活用ができるなら、私たちが感じた困難な作業を軽くし、農業に対するハードルの高さを一つ取り除けると感じた。
- ・農業未経験者が活動することによって、活動地域に客観的な意見を述べることもできた。



学生プロジェクト08

福知山公立大学FAST「防災と言わない防災プロジェクト」

プロジェクトの目的

本プロジェクトは、「福知山公立大学FAST」というサークルの中から発足した。このサークルでは、①学生の防災意識の向上、②防災に対するあらゆるハードルを下げること、③水害のあるまちという認知を広めることを目指している。この目的をさらに昇華させるべく「防災と言わない防災プロジェクト」を立ち上げた。

プロジェクトの内容

京都学生FASTという学生防災団体に加入し、福知山公立大学FASTを発足した。はじめは、ボランティアとして水害に遭った住宅の復旧作業に取り掛かった。また、京都BBQ協会会長兼防災士である森本隆さん監修のもと舞鶴市白糸中学校への出前講座を行った。さらに、避難所運営ゲームHUGに取り組み、防災意識の向上を図る調査を行った。

プロジェクトの成果

○学生プロジェクトのメンバーにとって

- ・「防災と言わない防災プロジェクト」への取り組みを通して大小様々な気づきを得ることができた。
- ・災害と無縁の土地で生まれ育ち、これまで災害を意識する習慣がなかったが、本プロジェクトを通して身近なこととして手軽に取り組むことができた。
- ・「防災は堅苦しくて小難しい」というイメージを払拭できた。また、日々の積み重ねが大きな災害に遭った際にとても役立つことを学んだ。
- ・昨今、騒がれる巨大地震に備えるためにも、より学びを深めたい。



地域キャリア実習

実習先 | 西日本旅客鉄道 福知山支社

岡本 美穂 地域経営学科 3 回生 兵庫県立豊岡総合高等学校(兵庫県)出身

実習概要

- 1 日目 JR 西日本の事業内容、保線区、電気区の見学（パンタグラフや遮断器などの仕組みの説明）
- 2 日目 車両区、駅員、運転手、車掌の見学（シミュレーターによる運転手・車掌体験）
- 3 日目 PBL 活動の事前学習（今ある舞鶴のツアーマップの見直しと公共交通機関の時刻確認）
- 4 日目 舞鶴散策（自分たちが作ったスケジュールの確認）
- 5 日目 舞鶴マップの発表、まとめ

実習を通して印象に残った点

JR 西日本で働く人のイメージとして、当初はデスクワークをする会社員などを想像していましたが、とりわけ車両や線路の整備を行うエンジニアの熱意に感動しました。実習では、アルバイトとは違う体験をさせていただき、働くことの重要性和人を満足させるための思いを肌で感じることで、今後自分が社会に出るといった気持ちが現実味を帯びてきました。また、自分がずっと思っていた企画という仕事を体験し、企業内で行う企画と学校内で行う企画では、プランを作るまでのプロセスや目的やターゲットなど根本的に違うことを知り、企画の楽しさと商品として形にする難しさを実感することができました。

JR 西日本株式会社と聞くと、西日本エリア全地域の鉄道を運営する大きな会社という印象があり、大学生活で培った北近畿への関心を活かすのは難しいと考えていましたが、支社ごとで管轄するエリアが分けられており、福知山支社は北近畿に根差した安全公共交通機関を目指し、その地域に住む住民が快適に暮らせるように地域の清掃活動やイベントにも率先して参加しているということを知りました。このように大企業だからといって自分に向いていないと視野に入れていなかった企業も、企業研究をすることによって、自分の将来の 1 つの選択肢になるということが分かりました。今後の就職活動では北近畿地域の企業を食わず嫌いすることなく企業研究していきたいと思えます。



実習先 | 但馬信用金庫

古泉 伊織 地域経営学科 3 回生 京都府立久美浜高等学校(京都府)出身

実習概要

- 1 日目 城崎国際アートセンターにて説明と見学、豊岡市役所職員による「靴産業」の講演
- 2 日目 但城崎支店にて業務内容と支店長の沿革の説明、信用金庫と銀行の違い、豊岡市役所にて豊岡市の取り組みの説明
- 3 日目 浮田産業作業所訪問、夢但馬産業フェア（豊岡合同企業説明会）の参加、人事部長による社会人マナー講座
- 4 日目 信用金庫の業務内容とクレーム対応、財務諸表の見方、職員組合の取り組み、本店内見学と礼勤、最終プレゼン準備
- 5 日目 プレゼン資料作り、インターン活動報告プレゼン、新入社員との雑談会

実習を通して印象に残った点

5 日間ある実習のうち、但馬信用金庫内の見学や役職紹介などは 1 日しか行われず、それ以外の 4 日間は豊岡市内の様々な企業を見て回り、各企業の代表の方のお話を聞くなど、但馬信用金庫のことだけでなく但馬信用金庫がある「豊岡市」について学ぶことができたということが大変印象に残りました。但馬信用金庫の経営方針の 1 つに「地域社会への奉仕」があります。経営方針に掲げられている通り、地域密着型の企業なのだを実習を通して肌で感じるすることができました。但馬信用金庫の渉外係の方は、自分の担当する地域の方のお子さんや家族構成まで覚えているそうです。実際、但馬信用金庫の方が他社の方と出会ったときに、「髪切った？」といった何気ない会話をしているのを目にしました。このような会話を耳にしたとき私は、これが但馬信用金庫の社風なんだと、大変驚きました。このように、但馬信用金庫で働くうえでは、まず地域について地に足を付けることから始める必要があるということが分かりました。

この実習を通して、狭かった視野が今までよりも広くなった気がしたので、その広がった視野を活かして就職活動を頑張っていきたいです。また、少しでも疑問に思ったこと、気になったことがあれば、自分が納得するまで調べてみようとも思いました。



実習先 | 綾部市役所 定住政策課

狩山 紘一 地域経営学科 3 回生 岡山県立笠岡高等学校(岡山県)出身

実習を通して印象に残った点

私が、就業体験先として選んだ「綾部市役所定住政策課」は、非常に特殊な部署であったように思う。勿論、「移住・定住」に関する課というのは、どの自治体にも存在する。舞鶴市の「移住定住促進課」や、課の名前にはなっていないが、福知山市にもまちづくり推進課で移住定住を扱っている。では、何処が特殊かというところに行っている「事業」である。その綾部市の定住促進政策は、今までの定住するための補助金などの資金援助にとどまらず、宅建業者さんと連携した空き家物件の販売の仲介や定住してからのサポート、分譲用地及び周辺の管理等を行っているという。一見して不動産や宅建業者が行うべき仕事を行っており、またその政策を中心となって定住政策課が行っているということで、「特殊」だと感じた。役所という事務仕事をイメージしていた私は、管理している空き家物件の草むしりなど雑務が仕事として多かったことに驚いた。しかし、綾部市が「移住定住」が叫ばれる前から取り組んでいた歴史があるため、できて日が浅い課であるものの、市が重点を置いて行っている政策に自分が今関わっていると感じられる就業体験であった。

この就業体験で「市民のために働く仕事」というものを体験し、知ることができた。私は就職希望の候補に、「地方公務員」を考えているが、今回の就業体験でより「自治体職員になりたい」と思うようになった。2020年のオリンピック以降は、日本経済のターニングポイントと言われており、大不況と円安リスクの影響でより一層生活が難しくなるという。売り手市場と呼ばれる今、我々 3 回生にとっては最大にして最後のチャンスとなると思うので、ここで学んだことを次に活かし、頑張りたいと思う。具体的には、1 回生から続けてきた公務員試験の勉強に力を入れ、可能であるなら冬のインターンシップで民間企業に行きたいと考えている。地元企業の説明会にも参加し、来年の就活本番までには万全の状態に臨めるように準備していきたいと考えている。



実習先 | 丹波ひかみ農業協同組合 JA 丹波ひかみとれたて野菜直売所

加藤 結女 地域経営学科 3 回生 三重県立四日市高等学校(三重県)出身

実習概要

- JA 丹波ひかみとれたて野菜直売所におけるヒアリングを実施
- ① 生産者の方々へのヒアリング（直売所での販売歴、生産物の種類等）
 - ② お客様へのヒアリング（購入者の属性、直売所の利用目的等）
 - ③ 営農経済部へのヒアリング（丹波市での農業の特徴等）

実習を通して印象に残った点

平日と休日とでのお客様の違いに、スーパーとは違う直売所の魅力に気づきました。収穫してから店頭で並ぶまでが直接なので、新鮮かつ野菜を作った人の顔を見ることができるといった部分がリピーターや遠方からのお客様を呼び寄せることにつながるのだと思いました。その他にも丹波市の農業の特徴についても学ぶことができ、例えば、大納言小豆を丹波市の逸品として市が認定する等、市を挙げてのまちづくりや地域の活性化につなげていこうとしていることを学びました。特産物によって丹波市を盛り上げていく姿勢に感銘を受けました。これから自分の進路を考えていく上では、受け身ではなく、自発的に行動していくことが必要になると思います。そのためにも、様々な人とコミュニケーションをとれるようになることが、どのような状況においても必ず重要になると思います。今後は、今回のヒアリングを通して多くの人とお話したことを活かし、就職活動をしていく中で企業の方との会話を楽しいものにしていきたいです。



診療情報管理士とは

病院で日々発生する患者さんの診療に関わる重要な**情報の番人**であり、医師や看護師が作成した診療記録をチェックする**お目付け役**であり、病院に蓄積する情報を分析し、診療や病院経営に必要な知見を提供する院内の**コンサルタント**です。

●実習病院を決める●

実習でお世話になる病院は、以下の流れで決まります。

- ① **実習を受けたい病院の候補を探す。**
(学生) ※2回生2~3月
- ② **病院に依頼状(予告)を送付する。**
(大学) ※2回生3月
- ③ **病院に連絡を入れ、実習の受け入れを依頼する。**(学生)
※3回生4~5月
- ④ **実習病院が決まる。** ※3回生6月
! 依頼状、協定書
! 自己紹介書 の送付・持参
- ⑤ **実習病院の事前調査・研究を行う。**
(学生) ※3回生6~7月
- ⑥ **実習病院に事前挨拶に行く。**
(学生・大学) ※3回生7~8月

が、病院にも様々な都合があり、希望が必ず叶うとは限りません。その場合は、先生と相談しつつ実習病院を決めることになります。

医療福祉経営学科の病院実習

病院実習を行う理由

診療情報管理士認定試験の受験資格を取得するには...

3年次前期までに、以下の全科目の単位を修得し、さらに、**病院実習**に赴く必要があります。

<1年次>

- 解剖生理学
- 医学英語
- 医療概論
- 感染症・呼吸器学
- 血液内分泌・腫瘍学

<2年次>

- 精神神経・循環器学
- 消化器・尿生殖器学
- 医療管理論 I
- 医療情報学
- 診療情報管理論
- 周産期・先天異常学
- 皮膚筋骨格・中毒学
- 医療管理論 II
- 医療統計学
- 診療情報分類法総論

<3年次>

- 医療管理論 III
- 診療情報分類法演習
- 診療情報管理実習



2018年度
実習でお世話になった病院

学生の感想

綾部市立病院

牧 浩太 | 京都府立福知山高等学校(京都府)出身
宮島 啓吾 | 大月市立大月短期大学(山梨県)出身

- 実習を通して各業務内容についての理解を深めることができた。
- 特に入院会計・外来レセプト・診療録登録の業務は専門的な知識がなければ何をしているのかわからなくなってしまう可能性がある。DPCやレセプト、診療記録、がん登録について予習をしておく、より理解を深めることができるだろう。
- どの部門においても患者個人情報を取り扱うため、ミスがないよう注意する必要がある。
- 病院内ではアットホームな雰囲気を意識されており、何でも気軽に質問することができた。

三田市民病院

山本 麗菜 | 兵庫県立西宮北高等学校(兵庫県)出身

- 様々な業務の実習を経験する中、改めて医療情報の重要性を感じた。
- 正確な情報を得るために必要な知識が不足していることを痛感した。それは難しいことを覚えているということではなく、基礎的な知識である。例えば、骨格部位や臓器の機能、医学英語の略語、医療の制度などである。大学の授業で学ぶ内容を十分に理解しておくことが、実習だけでなく後に受ける認定試験のためにもなる。
- 自分がどんなことを学んできたのかを実習先の方に伝えることも重要である。実習を通して、大学で勉強してきたことを生かせる楽しさを感じることができた。

手稲溪仁会病院

堀江 悠太 | 京都府立福知山高等学校(京都府)出身

- 文書スキャン業務では、文書内容の事前・事後チェックが必要とされており、正しい情報を正しく処理することを学んだ。
- がん登録業務では、実際の業務で使用されているシステムを使う貴重な経験が得られた。
- NCD(症例データベース)の登録においては、直接的に医師の実績に関係するため、「確認すること」を常に意識、正確な登録を行うことが重要であると感じた。
- 実習期間中における災害時には、自分の身の安全を確保しつつも、可能な限り実習先のお手伝いをするお役に立てることが必ずある。

安曇野赤十字病院

山崎 有里 | 大月市立大月短期大学(山梨県)出身

- 医療事務の仕事はレセプト請求だけではなく、様々な仕事があることがわかった。
- 病名をつける仕事が診療場管理の仕事だと思っていたが、診療情報管理の仕事は、主に入院係がつけた病名があっているかの確認や統計を行うことであった。
- 自動精算機や再来受付機を用いていたが、使い方がわからない患者さんが多かった。使い方の説明や、モニターの見方などを別途教える必要がある。
- 医療の勉強はもちろん、簿記や情報処理を勉強しておくことをお勧めする。また、Excelは使えるようにしておくこと。データ抽出等の簡単な関数は覚えておくことよい。

鈴鹿中央総合病院

佐々木 彩 | 京都府立西舞鶴高等学校(京都府)出身
林 真衣 | 三重県立神戸高等学校(三重県)出身

- 職場の雰囲気を体感することができた。
- 事務職それぞれの業務内容の理解が深まった。
- 病院独自のルールなども知ることができた。
- 自身の知識不足を痛感した。
- 自分が就きたい職種について考える良い機会となった。

市立福知山市民病院

寺本 義洋 | 愛媛県立南宇和高等学校(愛媛県)出身
早川 昇太 | 愛知県立杏和高等学校(愛知県)出身

- 実習中講義で聞いた言葉が頻繁に出るため、自分が今学んでいることに自信を持てた。
- 曖昧だった個人情報についての知識を再確認することができた。
- 実践を交えながらの説明だったため、より理解を深められた。
- 実習開始時には、診療情報管理士資格の勉強の仕方が分からなかったが、資格を持つ担当者に質問することで、苦労したことや勉強手法を知ることができた。

神鋼記念病院

田原 佳奈 | 兵庫県立出石高等学校(兵庫県)出身

- 実習当初は緊張と不安があったが、約2週間の実習で現場の温かさを感じることができ、楽しく実習ができた。
- 初めての機器の購入試算や科別損益の計算で、データの読み取りや分析が大変であったが、視野を広げながら取り組めた。
- 現場の方を前にしたプレゼンテーションでの報告は貴重な体験となった。
- 正確なデータや記録を基にした分析によって、病院の経営や医療の質、患者へのサービス向上につながる知見が得られることが分かった。

済生会横浜市東部病院

畑山 暁 | 福井県立道守高等学校(福井県)出身

- 実習を通して、書く力、分析する力も必要だが、人に伝える力が重要だと感じた。
- 学校で見る記録は、1つ1つが決められた様式に従って書かれているが、実際には、書く人によって違う形式で書かれていたりすることを知った。記録をできる限り標準化できるように教育やシステムの工夫が求められると思われる。
- すべての業務は人が行っており、ミスが必ず発生する。そのミスに気付く敏感さ、ミスを起こさない仕組みの構築が必要であると感じた。

伊勢赤十字病院

中村 遼 | 三重県立宇治山田高等学校(三重県)出身

- 病院に就職したあとも勉強を続け、人に説明できる位理解しなければならぬと、指導者の方たちと話して感じた。
- 統計を行う上で扱うデータがどのようなものか、扱うシステムやツールがどのような「特性」を持っているかなどを認識することが重要である。

Link topos 2018 in 静岡

LINK topos(公立大学学生ネットワーク及び全国大会)は、平成23年3月11日の東日本大震災に際し、全国の公立大学で展開された被災地支援・地域防災の活動をきっかけに、全国の公立大学の学生をつなぐネットワークとして発足、平成25年に第1回全国大会を開催、その後毎年開催されている。

第6回大会となった今年度は、全国から過去最高の41公立大学、163名の学生と約20名の教職員が静岡に集った。本学からは、福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎学生企画チーム「DOKKO」のメンバーの内10名と教員1名が参加、初日は団体の活動紹介、二日目は分科会に分かれての課題解決ワークショップに取り組み、三日目は学長会議と合流しての団体活動を紹介するポスターセッションで発表を行った。

3日間のプログラムには、全国から集った学生同士の交流と学びに加えて、教職員が問題解決に取り組むワークショップや学長先生との交流の機会が組み込まれ、学生はもちろん教職員にとっても充実した内容であった。他大学との交流の機会が乏しい本学学生にとって、他大学の学生との交流は視野を広げネットワークを形成する良い機会となった。また、教員にとっても、教職員対象のワークショップが開催されたことにより、他大学の活動に学び、自大学の課題解決のヒントを得る場となった。



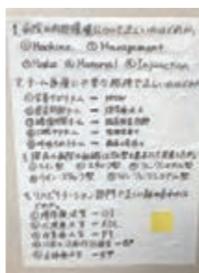
名桜大学(沖縄県)との交流

名桜大学は、本学と同様、診療情報管理士認定試験指定校(国公立大学は2校)である。わが国における数少ない病院事務職養成を行う大学同士として、本学と名桜大学は今後も協力関係を続ける必要がある。その契機として、当ゼミは、2018年10月16~19日の沖縄研修において、名桜大学国際経営学群診療情報管理専攻の上門ゼミ・大城ゼミとの連携により、診療情報管理士認定試験を控える当ゼミ生と名桜大学3回生との交流を兼ねて、診療情報管理士認定試験の模擬試験作問ワークショップを実施した。

結果として、50問の模擬問題を作成し共有することができた。本学科の学生にとっては、他大学で同様の学びを進めている学生と交流すること自体が初めての経験であり、ワークショップを通じて、資格取得や研究活動、および地域貢献活動などについて、学生同士で情報交換や意見交換ができたものとする。

当活動は次年度以降も継続する。今年度は時間の都合上ワークショップのみを行うにとどまったが、卒業研究テーマの中間発表など研究交流会の実施も予定している。

なお、本研修においては、本学2期卒業生(玉那覇氏)が診療情報管理士として勤務する中部徳洲会病院の見学、および現場事務職者との会談も実施した。大都市である那覇市から離れた名護・中頭・北谷などの中部エリアの「地域医療」を一手に担う当該医療機関について、実地で学ぶ機会が得られたという点でも、本研修の意義があったものとする。



他大学との交流を通して

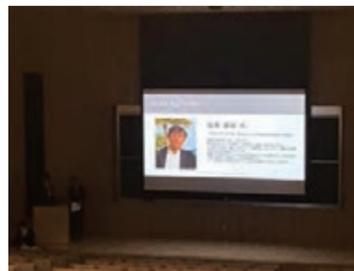
新たな発見と知識を。



京都から発信する 政策研究交流大会

2018年12月16日に龍谷大学深草キャンパスで開催された「第14回京都から発信する政策研究交流大会」(主催:大学コンソーシアム京都)で杉岡ゼミのBチームが「ベスト質問賞」を受賞した。この大会は、都市が抱える課題を見つけ、それを解決するための研究をおこなう学生に発表の機会を提供することを目的としている。今年度の発表テーマは「都市政策全般」であり、書類選考を通過し本選に出場した口頭発表55本、パネル発表17本の計72本の発表があった。

本学からは杉岡ゼミBチームが「地方自治体における副業推進の課題、展望」(口頭)、杉岡ゼミAチームが「防災と言わない防災のススメ」(パネル)、佐藤ゼミが「京都舞鶴港におけるクルーズ船観光の活性化に向けて」と題して3チームが出場した。



京都府立大学 かごらとの交流について

2018年9月22日(土)、福知山公立大学(以下、公立大)と京都府立大学(以下、府大)の京都地域未来創造センターの共催により、本学学生6名と京都府立大学生8名による意見交換会を京都府立大学で実施した。

プログラムは「かごらカフェ」で行われた京都府立大学の学生や市民を交えたクイズ形式の交流からスタートし、京都府立大学の築山崇学長も加わってミーティングも行った。

府大からは「学生会かごら」や「ラジオ部会」、ボランティアサークル「太郎と花子」の活動紹介、公立大からは防災サークル「福知山公立大学FAST」、こどもの居場所づくりプロジェクト「きつずすとにーる」「福桔祭」「まちかどキャンパス学生企画チームDOKKO」「学生広報スタッフ」の活動紹介があり、質疑応答も含め活発な意見交換を行った。

